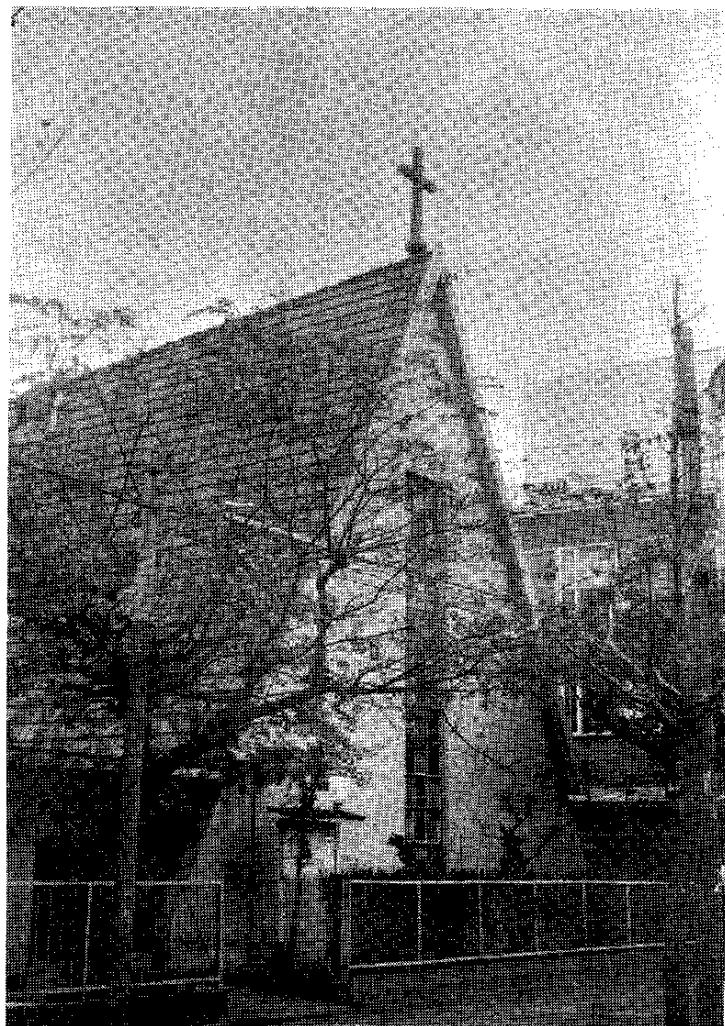


# ま し み ず

教会設立 65 年記念

小倉バプテスト教会



一つの川がある。

その流れは神の都を喜ばせ、

いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。

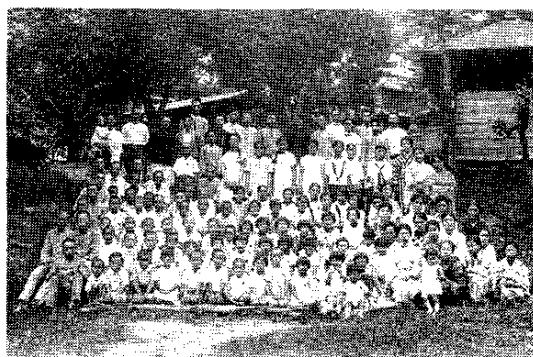
神がその中におられるので、都はゆるがない

—詩四六・四五—



大正14年2月14日  
教会自給独立感謝会  
中央腕組みをしている  
のが片谷牧師、左隣り  
青柳牧師、バブテスト  
の大先輩たちが2列目  
にぎらりと並んでいる。

大正の末頃の花の日  
礼拝後の記念撮影  
右端は米谷執事（現シ  
オン山教会）、左端の  
チヨウネクタイの青年  
が青木執事（現富野教  
会）

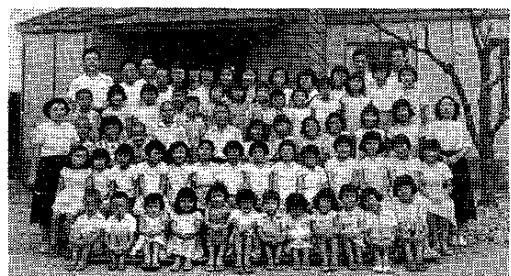


昭和4年8月  
夏期聖書学校  
中原の皆好園でその頃  
毎年行なわれた。



昭和17年  
片谷牧師の送別会  
大和、佐々木両執事、  
吉崎ケイ子姉、橋本初  
枝姉らの顔がみえる。

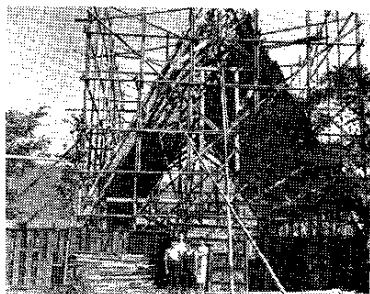
昭和22年頃の教会学校  
会堂はまだなかつたが  
聖書を学ぶ子供たちの  
表情は明るい。



昭和27年 夏期学校  
植木牧師の時代  
この頃の小学生・中学生  
の二世たちがもうじ  
き幼稚園や小学校にあ  
がつてくる。

昭和33年  
金子牧師就任式  
教会の塔の2階は青年  
や少年少女会のたまり  
場だつた。本会堂建設  
のため間もなく塔はこ  
わされた。

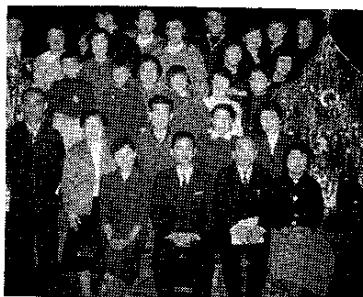




建築中の本会堂  
(昭和33年)



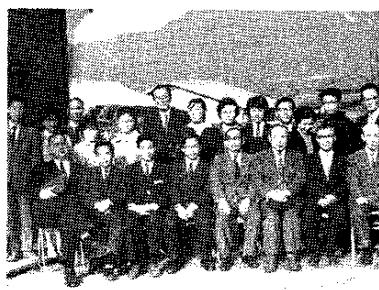
紫川上流でのバプテスマ  
(昭和29年)



国立病院でのクリスマス  
(昭和33年)



会堂献堂式  
献堂祈禱は故秋月牧師  
(昭和33年)



北方伝道所 上門牧師就  
任式 (昭和37年)



昭和35年頃の  
少年少女会



片谷牧師夫妻を囲んで  
幼稚園同窓会(昭和38年)



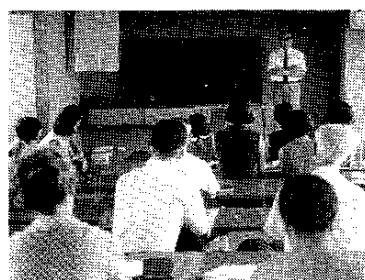
新生運動チーム  
フォード夫妻を迎えて  
(昭和38年)



競馬場での野外礼拝  
(昭和39年)



教会学校成人クラスはじ  
まる(昭和39年)



帆柱山での教会一泊修養  
会(昭和42年)



新年早天礼拝のあとで  
(昭和40年)

目 次

教会設立六十年回顧写真展	青年会のことなど	山田 雄次	二七
思ひ出	教会について考ること	畠 義彦	二八
恐れるな小さな群よ	力の限り十字架のために	久保 徳男	二九
教会設立六十年記念礼拝プログラム	小倉人への第一の手紙	松本 寛	三〇
ランカスター	雜感	清水 文博	三一
青柳 茂	私たちの責任	木原 照輝	三一
矢野 圭介	北方伝道所について	松尾 孝平	三一
米谷美知藏	教会のもろさと強さ	上門 治	三一
丸田 秀夫	x	x	
大和 勇	x	x	
沢野 正幸	湯金幼稚園のあゆみ	金子 洋子	三六
吉武 昭雄	思い出にかえて	x	
植木 基介	x	x	
大和 虎雄	イエスを仰ぎ見つつ	金子 純雄	三八
佐々木節生	x	x	
吉崎彦次郎	x	x	
佐々木益男	教會略史	四〇	
座談会「回顧と展望」	教勢の推移	四五	
未来の教会はかくありたい	役員名簿	四六	
吉崎 泰博			
後記			
未来の教会はかくありたい			四七

教会設立六十年記念礼拝 説教



恐れるな小さな群よ

片 谷 武 雄

ルカによる福音書十二章の三十二節に「恐れるな小さい群れよ、み国を下さることは、あなたがたの父のみ心なのである」と記されています。文語訳の聖書によると多分こうであつたと思ひます。「おそるな小さき群よ、汝らにみ国を賜うことは、汝らの父のみ心なり」塚本虎二氏の訳によれば「小さきむれよ。おそることはない。あなたがたの父上はみ国をあなたたちに下さるつもりだから」となつております。

本日、教会設立あるいは組織六十周年記念の日を迎えることは、お互に感謝に堪えない事柄だと考えます。六年間の歴史、それはたしかに完全なものではなかつたに違ひないので、失敗であつたかもしれないのです。しかし、私、そのことを考えながら感謝に堪えませんことは、教会によりましては、道徳的な失敗があつて、致命的な影響を受けることも、ままあるのですが、小倉教会の六十年の歴史には、さらにさかのぼつて伝道開始以来八十年近い歴史には、道徳的な失敗、いわゆるスキャンダルなるものがなかつたと思われ、消極的な意味ですが、こういう意味でも感謝せざるを得ないのであります。我々が十分にできなかつた、失敗であつたこと、むしろそのほうが、我々が弱いうちに全うせられるという意味において、さらに感謝になるのであります。

今朝、私にこのまことに貴重な機会が与えられたのですが、私、二十三年にわたる当教会の伝道におきまして、もつとも大きな出来事は何であつたろうかと考えてみると、それは大正十三年に当教会が自給独立にふみきつたことであらうと思うのであります。自給独立と申しますのは、教会が経済的に自給独立することであります。当時、私共の教会は牧師給の約半分をミッションボードの補助に仰いでいたのです。その補助をととわつて独立しようというのであります。が、今の時代とは経済単位も違いますし、その半分の補助をことわるということは大事業であつたのであります。回顧録にも一部記しておりますが、当時、私は三十才、子供が二人の四人家族、それにお手伝いがいました。一挙に牧師給の半額をことわるということは、非常に勇気を要した事柄でありました。当時の教員と申しますと、四十数名お

られたのですが、その大部分は明治専門学校の生徒と市内の各中学校の生徒諸君であつたのです。家族信者というのは七家族か八家族であつたと記憶します。当時、南バプテスト教会の中には独立教会といふのは一つもありませんでした。市内のプロテスrant諸教会もみな補助教会であつたのです。しかし私は日本教化のためには教会が一日も早く自給独立することの必要を痛感しておりました。しかしながらこわいのです。もし最悪の場合は三度の食事にもことかくであろう。三度は一度に、一度はおかしくて、あるいは餓死するかも知れない。そういう心配を本当にしたのであります。たしかにそういう実例もなくはありませんでした。相当長い間、悩みました。悩みつつ祈りました。

独立を決意しましたのは、大正十三年の十月二十二日の夜であります。それに先立つこと十日あまり、十月十日前後であつたと思します。当教会に当时、山口県の秋吉台で大理石の発掘事業をしておられました本間俊平先生がおいで下さいました。日曜の朝拜の説教をして下さいましたが、その時、先生のおつかいになつたみことばがこの三十二節にあります「恐れるな小さい群れよ。み国を下さることは、あなたがたの父のみ心なのである」というおことばでございました。

「よいよ自給独立を断行しようとすることになりますと、経済的責任を負わねばならないことをおそれたのか、自給独立に反対して教会を離れ、のち消息をたつた役員もいました。これまた考えてみると、人間として無理からぬことがあります。

人間には消極的な意味での問題をおそれることはざらにあります。が、積極的な事柄を致します際にも恐れが伴いかちであります。自給独立と申しますと、ただ排外的な、外国をきらう様な、非協力的な、今日エキュメニカル・ムーブメントというのが盛んであります。自給独立と申しますと、ただ排外的な、外国をきらう様な、非協力的な、今日エキュメニカル・ムーブメントという事が盛んであります。協力をすることの様に誤解されがちであります。それはよく考えない結果の誤解だと思われます。協力をするとということは、まず自分自身、自分の足で立つことによつてはじめて満足な協力ができるのであります。よりかかつておつて満足な協力というものはむつかしいと思うのであります。今日、国際協力の声が盛んですが、その国際協力の声をきくたびに、自分自身が國としても、自分の國が本当に自分の立場に立つことは必要であろうと思うのであります。卒直に申しまして、我々は明らかに敗戦国民であります。自主性の乏しいものを持つてゐる。安保条約から日米軍事同盟、独立国の看板が掲げられていますが、この間実は軍事同盟によ

つて首をおさえられてゐるかうなりであります。そこに自主的なもののかけて行く傾向をみなければならない。こういふ傾向をたて直すもの、それは本当に神を信じ、神とおのれとの関係をはつきり持つ人、すべてを神とおのれとの関係から割り出して考えるといふこと、そういう精神の持ち主が出来ません限り、社会の自主性も國の自主性も期待はでき得ないのではないかと思われます。そういう意味におきまして、過去の自給独立は主として經濟的な独立でありましたけれども、なお精神的な意味におきましての独立といふものは、現在から将来にわたる課題であることを感じるものであります。私がこう申しますことは単なる理論ばかりではございません。

私、当地にご奉仕を申し上げておりました間、二十年近くバイブルクラスをしてご協力下さいましたかたが今朝この席にご出席下さっています。当時、西南女学院の教師であられましたランカスター先生、二十年近くも一つの教会にバイブルクラスをもつて奉仕されるといふことはこれまた容易ならぬことであります。先生は当教会にいろいろご奉仕をして下さつたのです。ランカスター先生は非常に偉いと思うのです。私のような、なかなか我ままなものを牧師として立てて、自分はいつも協力者の立場にお立ち下さつたのです。こういう点において自主性といふことが、ランカスター先生の態度に学ぶべきものがあると感じるのであります。

この六十年間のことを考え、また私自身が直接関係しました二十三年にわたる歳月を考えますとき、いろいろなことがあつたのであります、もつとも大きな問題として、現在から将来にわたる我々の関心を持つべき事柄は、本当に神の前に自分の信仰を確立して、自主的な立場をかちとることだと思います。そういう意味において、ルカによる福音書の十二章の三十二節をもう一度、ご一緒に天の父からいただきたいと思うのです。

「恐れるな、小さい群よ。み国を下さることはあなたがたの天の父のみ心なのである」こわがつてはいけないという意味です。一昨日来うかがつてはりますと、御教会でも、また附属の幼稚園にも大きな夢があることをうかがつてはいるのであります、その夢を実現する際に恐れてはいけない、み国を賜うことは天の父のみ心なのであります。かえりみて、われわれが、いかに恵まれた、ありがたい天の父との関係に導かれているかを感じまして、深く感謝に耐えないのであります。

(日本基督教団 西荻教会牧師)

# 教会設立60年記念礼拝プログラム

昭38.11.3

## 礼拝説教「恐れるな小さい群よ」

司会 金子純雄牧師

奏樂		
頌栄	539	
主の祈		
交説	27(詩118)	
讃美	66 «聖なる聖なる聖なるかな»	
聖書	ルカ12:22~34	北方伝道所 上門治牧師
祈禱		
讃美	194 «さかえにみちたる»	
説教		片谷 武雄先生
祈禱		
讃美	294 «みぐみゆたけき»	
歴史概略報告		大和 虎雄執事
歴代(出席)牧師紹介		
記念品贈呈		佐々木節生執事
思ひ出		米谷美知藏先生
思ひ出		ランカスター先生
思ひ出		河野 正幸先生
祝詞		
讃美	880 «立てよいざ立て»	
献金		
感謝		河野 重良執事
祈禱		
讃美	546	
祝禱		
(報告)挨拶		佐藤 好文執事

## 教会創立六十周年式典

大和虎雄

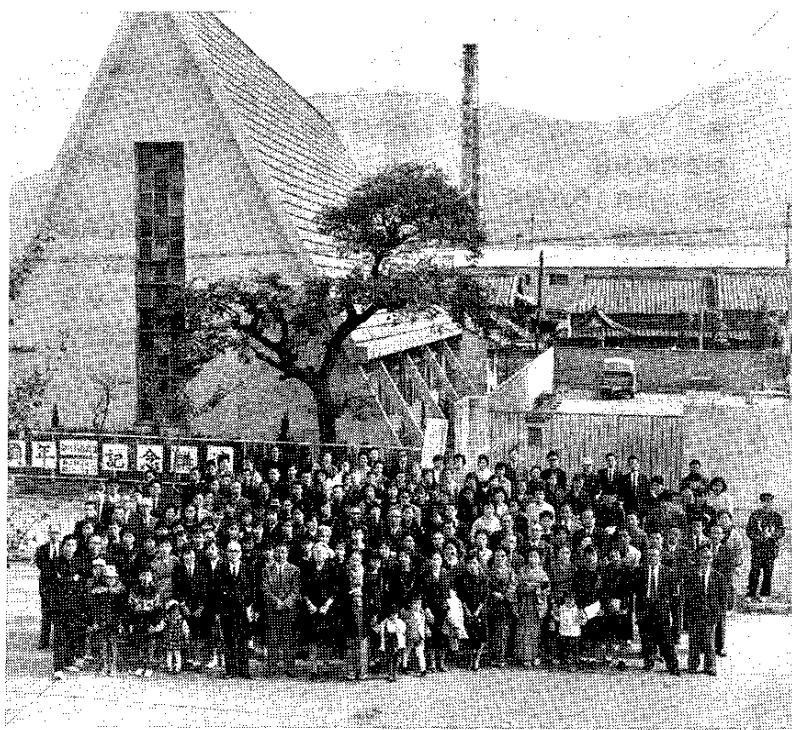
遠くより馳せ参じたる友もいて会堂に人は  
満ち溢れたり

髪は既に白き加えし友の顔もの云えは昔の  
ままの声なる

故もなく涙湧き来てやみ難し盛んなる式の  
隅に坐しいて

古き友旧き師よりと相つきて式典の費は獻  
げられたり

聖言に偽りはなし祈りつつ願いし額は与え  
られたり



# 思い出



ランカスター

久しぶりでございます。今日、私は六十年ぶりに皆様のなつかしいお顔にお目にかかるのを感謝致しますとともに、今日、六十年記念日に出席させて頂けたことは非常に幸いだと思います。長い間、この教会の中で、バイブルクラスを持つことができましたことは大変なところでした。

ある学年でしたが、私は生徒たちにイエス様の譬をたくさん教えました。その後、勉強がおわつたとき、生徒たちに、どの譬が一番すきでしようかとたずねました。一人の信者になつた生徒が「ぼくは、イエス様の百姓の譬が一番好きです。その譬の中には、そのお百姓さんが一生県命に働いて、偶然に宝物をみつけました。ぼくはあのお百姓さんのように宝物を何も探していません。偶然に教会に参りました。偶然に神様のお恵みをいただきました。

した私の友人は、真珠を探した商人のよう一生けん命に立派な真珠を——それはもちろん数いですが——探し見出しましたが、私は偶然にいたしました」とおつしやいました。私は生徒たちに「その通りです。私たちも探しても探さなくても神様のお救いを見付けることができるのです」といいました。

本当にこの教会に長い間、神様のためにご奉仕させていただきました。教会がなくて、たいていバイブルクラブもございません。教会は神様がお用いになるもので私たちに救いを与えて下さるものでございます。この教会は戦争になつてたいへん苦しみましても続きました。教会は神様のものですから、いつまでも続くのです、先生たちは、日曜学校の先生たちはやめて、外の先生がいらっしゃいます。牧師先生はやめて、また外の若い方が牧師になつて続きます。戦争になつて、教会がこわれて、本当に希望がないと思ひますけれども、やっぱり神様の聖靈によつて、その教会は再び集ることができますし、この教会はそういう歴史をもつてゐるのをご存じます。もう一つのよいことは、この教会によつて新しい教会が生まれました。教会は私たちのものばかりでなく、外の小倉、北九州、あるいは九州、日本国中のためでござります。どうぞ皆様、若い方が一番多いと思いますが、教会をはなれない様に、教会は神様の教会であるというこ

とをいつまでも覚えていただきたいと思います。教会に對してご恩を返しましよう。教会は神様からいたたいたものですから、どうぞ教会のために一生けん命にして下さる様お願ひします。

私は近いうちに、再びアメリカに帰りますが、いつもでもこの教会のために祈らせていただきます。これから長い歴史があると思いますが、皆様の熱心さによつてこれからますますができると思ひます。

(西南女学院名譽副院長  
在米国テキサス州ヒューストン)



青柳茂

教会組織六十年を迎へ、猶

お益々發展途上を驅進せら

る事を祝賀申上げます。この際何か書けとの御命令に従い、筆を執りましたが、さて何を書いたらよいか迷わされます。

抑も教会の發展ということは、實に不可思議な事だといわねばなりません、パウロは最初アジャ(ロマ洲制のアジャで、其の中心であつたエペソ)に伝道する計画を樹てました、けれ共「アジャで御言を語ることを聖靈に

禁じられた……」のであります、そこで彼はフルギア、ガラテヤ地方を通つてムシヤの辺に来たり、進んでピニアに行こうといたしました。しかるに、それも「イエスの聖靈が許し給わなかつた」のであります(行一六〇)一八)伝道の業が聖靈により、イエスの聖靈によつて禁止されたことは、眞に不可思議なことだと云わねばなりません、遂に一行はトロアスに行つたのであります。

「こゝで夜、パウロは一つの幻を見た」のです、

(一六〇九)これが有名な「マケドニヤ人の叫び」の物語りです、彼らは決然としてマケドニヤに渡り、ピリピに伝道を開始し、かくて福音の歐州進撃の門は開かれました。パウロは實にピリピ伝道の始祖となりました。しかしパウロはピリピ教会を起したものが自分だとは申しません、「あなたがたのうちに良いわざを始められたかた」(ピリピ一〇六)を敬虔なまなざしをもて凝視している、それは申すまでもなく教会の首なる「主イエス」である。それは伝道者パウロを一途に、馬車馬のように他の途にゆくことを禁じて、此の地に導き、伝道者の業をなさしめ給うたイエス御自身である事は、あまりに明瞭な事實であつて、栄光は只だ主にのみ帰すべきであります。

それはピリピ教会のみの事ではなく、何れの教会も同様です。教会の首なる主イエスが六十年前、愛する小倉

之を導いて下さつた事に深い感謝と讃美とを捧げます。

(元小倉教会牧師)

神戸の須磨で余生を静かにすごしておられた先生をおたずねしたのは五年前のことでした。

小倉教会六十周年のことを報告し、記念誌の計画を申上げてご寄稿お願いして帰るとすぐ送つて下さつたのがこの玉稿です。先生は一昨年召天されました。遂に記念誌をおめにかけることができなかつたことを申し訳なく思つています。

(金子)

大正元年（一九一二年）頃、小倉と八幡両教会で文歎クリスマスを実施した。おそらく文歎クリスマスは当地では始めてのことであつただろう。私共十四、五名は八幡から小倉教会のクリスマスに参加した。寒い夜でマントの襟を立てて訪れた。

会堂は文字通り立錐の余地もなかつた。昔も今もかわりのないクリスマスで、私は演説「イエスの降誕について」と、参加者によるベーゼント「イエスの降誕」を演じたことを思い出す。

その後、ずっと下つて大正末期片谷先生時代、私の学生の時、夏季休暇に帰省しては、帰学前九月初旬、音楽

礼拝を必ず実施した。

このため「さんびか」を若い方々と一生懸命に練習をして、音楽礼拝は可成の成果を収めていた。

その他、中原海水浴場や、橋本氏別荘をおかりしての夏季学校、石井漢の舞踊公演、賀川豊彦、本間俊平、金森通倫、木村清松諸先生の特伝等の実施は、片谷先生の手腕が遺憾なく發揮された一面である。

男女学生生徒が週報の印刷、教会堂の掃除などに県命に奉仕した大正中、末期のことがこうしてペンを走らせていると、あの人の顔、この人の姿が、それからそれと想い出されて来る。

(現シオン山教会員)

半世紀以上の昔にもなりますが、小倉浸礼教会（バプテスト）は、京町（今の湖月）にあつた。牧師には小野兵衛先生、私は八幡浸礼教会の日曜学校の上級生で、牧師は青柳茂先生（後小倉の牧師にもなられ、現在は隠退されて須磨にお住い）の時、当時両先生は伝道には緊密に連絡せられたいたようで、殊に青柳先生は、自他ともに許したS・Sの大家でもあり、最も力をいれられた。小倉教会もS・Sは仲々盛んで、常に両教会とも百名以上の生徒を擁していた。

## 米谷美知藏

(前略)私は小倉教会でお世話になつたいろいろなことを思い起しますが、私共は信仰の面において仕事の面においてくらしの面において片谷先生のきちようめんなきちんとしたしつけをいたしました。掃除も先生が先頭に立つてして下さるのでですから、いつもきちんととした掃除ができました。私は先生がよく言われた「よい市民になれ」ということを忘れることができません。自分なりの人生観として私は「掃除をまかせられる人間になれ」とたびたび申しますが、これは十五年間の片谷先生のご指導によるものと考えておられます。土曜日になると生徒をつれて教会の掃除に参りました。教会の日曜の講壇の広告を大阪町の停留所と教会の前に書く仕事を時に私に命じられました。習字の下手なきらいな私でしたが、十五年間のそういうことからどうやら字が書けるようになつたといふことも教会生活の大いなる恩物と考えております。もつとも強く培われたことは独立の精神でした。自給独立ということでございました。いろいろな催しがありました、私共はポスターをはつたり、不足番をしたり、喜んでそういう奉仕をさせてもらつたことを覚えております。これらのこととも私の人生に大きなプラスとなつたことでした。

仕事の面において印象深く残つておりますことは夏期学  
校をさせていたいたいことです。どういう機会でしたか、日曜学校の重要性といふものを先生から教えられて強くうたれました。これまでのようではいけない。ひとつ正式の資格をとつて奉仕しようという気持ちになつて二年連続して受講し大正十四年の夏、帰りましてすぐにさつそく夏期聖書学校を開いたわけです。夏休みに帰省した大学生に助けられ十数回か続きました。一緒に大切な仕事にたずさわらせていただいたという思い出は終生忘れることができません。その当時の教会は、今の九州工大の明治専門学校、小倉中学校、小倉工業あるいは実業青年のかたがたとみな若い人たちばかりで教会のためにいろいろ奉仕されました。私共もよろこんでそれに参加させていたいたいわけでございます。青年の一途な気持といいましょうか、これが教会の発展に大きな働きをするものだとしみじみと感じます。十五才から二十才前後の恵本バンドの人たちが「日本を救うものはこの福音による外はない、このために我々はふるい立とうではないか」と花崗山の頂上で神様にかたく誓つたという氣概は若者の気概ではござりますまい。老人もまた「若者たちは幻を見、老人たちは夢を見る」と聖書にもあるように、気持はいつでも若返えることができます。教会の中に若さがみなぎるときには異常な发展をとげるものだと考えられます。教会は交わりの場であり、勉強の場所であり、訓練を受ける場所であります。教会生活は信仰の上において大きな働きをするだけでなく、人間として職業人と

して社会人として立派な教養をつむ根本になると考えます。もちろん、教会自体の大きな自覚と責任が必要ですが、私共は教会生活を充実させることによつて数々の賜物がいただけるということを強調したいと思ひます。（後略）

（折尾女子経済短大学生部長 前西南女学院高校長 シオ  
ン山教会執事）

### 丸 田 秀 夫

片谷先生の御活動はお目にかかる前に、親戚を通じて知つていた。小倉にお世話になつた期間は、昭和三年から十年まで、その間、東京勤務もあつた。暫くは日基千駄ヶ谷教会員のまゝ客員であつたが、愈々転会することに決心し、それが形式的でなく、バプテスマ（浸礼）式によつて新会員と共に行なわれた。バプテストの精神であり、厳肅であり、いつまでも印象に残つている。そのうちにSS教師に任命され、米谷校長のあの穏かな実直誠実な御指導の下に奉仕、クリスマスの催しや、花の日の病院訪問遠足等々。

小倉地区の合同賀川伝道あり、家内と共に手伝させて頂き、賀川先生に近く接することを得て感銘をうけた。

その間戸畠鉄物入社始めての九州一周会社旅行と同時期になつたが、旅行の方を放棄したことにして当然乍ら、悔はなかつた。

家族に子供がないまゝ、家の発案で先生のお許しを得て土曜学校を始めた。砂津中津口の藁屋根の小さい我が家で、夕方六時頃から一時間位、近所の素朴な子供ばかりであつたが、いつも二、三十人位集り部屋に溢れた。感激で一杯であつた。さゝやか乍らクリスマスも祝つた。その後東京に移つても、再び、木曜学校を始めた。

教会では青木さん、米谷さん、佐々木さん、特に親しい大和さん、本儀夫人（故人）戸畠鉄物の新社員土器屋君（現在日立金属常務）、それに学生の松谷君達、希望により学生達のためにクラシック・レコード・コンサートを開き、夏休みの一晩を楽しんだ。ある日曜の午後、ボロオートバイの後に大和さんを乗せて悪路の福間辺までドライブしたこと也有つた。色々と茶目も發揮した。

片谷夫人の先生への御助力はいつも心を打たれた。  
糸屋町通りはなつかしい、紅い夾竹桃が白い鉱澤煉瓦壇の上からのぞいている通りを経て、茶褐色の塔のある木造の会堂。今は通りも場所も変り想像もつかない。時と所と人は移り變るが、唯一、限りなく遊び行く栄光がある。すべては感謝。

（一九六五夏）

（日産車体工機株式会社常務）  
在藤沢市

## 大和勇士

り、会社をやめて豆腐屋になつたりして離脱しました。)

昭和三年？春五月？（秋十月頃？）片谷先生の指導で米谷未知蔵氏？が委員長格で故柏原君が副委員長格で田町三丁目角間口五K奥行十二Kの二階家が選ばれて、其校寮となりました。勿論”其校”とは聖書からの引用であります。

一、寮生、故豊福勝治（明治専門應用化学科三年生）

故徳本春芳（小倉工業校機械科四年生）

吉原充（小倉工業校機械科二年生国鉄小

倉工機部）

堀内須藤（小倉工業校吉原君の親友）

大和勇（八幡製鉄）

外三位名位いたと想います。

一、当初は寮母がいなくて寮生が一週間交替で炊事を分担していましたが寮生活はユーモラスで随分と思い出話もあるのですが今では寮生の諸君は居所不明か既に故人となられて共に語るすべもありません。

一、寮の定例集会

毎週木曜日（と記憶します）片谷先生を中心にして聖書

の研究、祈禱会を開き、仲々盛大でした。

日曜学校＝毎週寮生を中心に近隣の子供と仲よく遊びま

したが私の記憶では二年間位続いたと思います（私は途中から朝鮮へ無錢旅行に出かけた

戦争の末期の三年間が小生の小倉における牧会の時です）

あつた。そして最後の一ヶ月間は炭鉱の中で半強制的に

野外伝道会

每週土曜

、雪も雨もものは熱く燃えあがつた私達

は京町三丁目角（湖月堂前）か常盤橋畔で約一ヶ月間位続けました。桂三郎君がハーモニカの名手？で由城君が歌い、私はお話しをしたものでした。

◎山越町でセツツルメント運動を始める事に豊福さん達の動議で決り、村上氏宅で開始しました。土曜学校を開設し賀川服の普及外生活改善を目標に種々と企画もありましたが結局一ヶ月間位で、経費が統かず一場の夢と終りました。

楽しい想い出の中には今だに忘れ難いものがあります

が小倉駅ホームで教友や師を送別する場合よく歌つた

”また逢う日迄”の合唱、中原の夏季学校、其校寮日曜学校の子供達を連れてクリスマスのお祝劇をやつた時など、私も若かつたし純真そのものゝ時代が懐しく思い出されます。

沢野正幸

宗教部隊として國のために奉仕をさせられた。

思い出の最大なるものはどんなに空襲の危険の真只中にあつても礼拝を一度も休んだことがないことがある。キリストの名のために少くとも二三名は必らず礼拝に來たものだ。

あの大きな紺屋町の教会堂が、軍隊の手で数時間にして打ちくづされてしまふ姿は今も涙なくしては考えられない。それは國の滅亡の近づきつつある徵しでもあつた。バビロンの河辺に故国を偲ぶ経験こそはしなかつたが、うす暗い千何百尺下の炭鉱の火の中で、一刻も早く戦争の終末を祈つたものである。

小倉教会の悲しい分裂のあつた後、片谷牧師と小生の兄とが神学校における同窓のよしみで、招聘をうけて行つたのであるが、二年後に分裂派の青木兄らとの円満な解決に到達することができたのも幸であった。

郵便局に勤いていた相原兄が会計の重責を荷い、橋本老夫妻、大和兄、佐々木兄らも、やつとの思いで教会を支えていた時代である。

週に何回かは憲兵が牧師館を訪問に来るような時代になつては天に運命をまかせるような心になるのも当然であつたろう。

炭鉱に奉仕中、宗教部隊の僧侶方と休暇をいただいて小倉に戻つたのが、八月十一日そして翌日は小倉が原爆の御見舞を受ける日であつたのである。それが長崎に転

向したのであるが、今はすべてを越えて働き給う神があんな困難な時代にも教会の柱であり給うことをほめたをえたい。(日本バプテスト同盟 杉並教会牧師)

### 吉 武 昭 雄

「柱に打つた釘は、抜くことはできるが、釘のあとにはいつまでも残るものだよ。ねえ、君」。これは何かの折に中村佐一先生が私に話されたことであつた。

佐々木さんから『六十周年記念誌』を発行するのに、何か思い出の一部でも投稿するよう』とのお便りをいただいて、小倉教会の皆様とは、とつても顔をあげて話すことのできない、はずかしい、罪人のかしらである自分が涙のとりなしの祈りを捧げて下さり、愛の労をとつて下さつたかは、私自身が最もよく知つてゐる。

昭和二十五年十一月五日に、紫川上流で、冷たいぞれの降る午後、バブテスマをうけた感激は今でも鮮やかに残つているが、それからあと、私のしてきたことは一体何であつたろうか。数少ない男子青年の中の一人として、皆様方に愛していただくのを好いことに、まるで私が教會を背負つてゐるかのように思いあがり、傲慢

の限りをふるまつて來た。中村先生が辞任され、山崎兄がウオーカー師のヘルパーとして転出されたあと、塔の二階を改造して住みこんでからは、殊更に目に余るものであつたことを、今にして思い起している。野卑で、敬虔さなど全然なく、冗談ばかりとばしていた私に、役員方はどれほど心を痛めておられたことだろうか。

会堂の掃除や事務的なことでは、確かに他の方々よりも多くをしたかもしれないが、その裏には、人から認められたい野心がひそんでいた。又、人々からほめられたりすると、まるで完全なクリスチヤンの標本でもあるかのようにうねぼれていった自分であつた。執事に選ばれると、自分の人格がさもすぐれているかのように、更に思いあがつた。或るおばさんが私に言つた。「あんただが役員に選ばれたのは、背広が新しいからだよ」と。これほど鋭い、適切な批判はない。日曜毎の礼拝だけにしか見えない方々にとつて、「新しい背広の青年」が目立つたことは確かであつたろう。『テモテ3・6』の御言葉が心にくいこんで來るのである。

植木先生が着任されると、ますますひどくなつた。年令が私より若いということに優越感をもつて、友達扱いにしていた無礼さを、今思うと自分ながら顔が赤くなる。釘のあとが残りすぎている。人に言うこともできなかつた私に対しても、植木先生の注いで下さつた深い愛と配慮がなかつたら、今の私はなかつた。とつて

も、信仰的にも人格的にも私などの到底及ばないすばらしい先生を見下していた私のあさましさよ。思えば思うちほど、私の顔は、はずかしさでほてつてくる。

私の右手の中指のつけ根には、今も一筋の傷が白く残つてゐる。或る日曜日夜の伝道会のあとで、こともありますうに植木先生のお兄様を殴つた時の傷あとである。私は、余りにも多くの罪を、小倉教会では重ねた。とつても思ひ出など書いて投稿する資格はない。ただただ、こんな私に對して、限りない愛と忍耐を以つて見守り、忠告を与えて下さつた多くの兄姉の祈りに感謝するのみである。それにしても、何と母教会の慕わしいことよ。毎月送つていただき週報の消息欄を見ては、なつかしさで一杯になる。あれから十年、なお私の記憶にあるお名前に接するたび、小倉教会時代を思い出す。雨の降る日は説教が聞えなかつたジュラルミンの会堂。松田兄と乗りこえては早天祈禱会に出ていた黒ぬりの門。目をくりくりさせて聞き入つていた教会学校の生徒たちの顔々。魚の頭をもらつて帰ると、口笛一つでとんで来てまつわりついていたジョン。「大和さんの白髪を全部抜いたら、西村さんのようになるでしょ」と、植木師就任式のあととの昼食会で笑つておられた三善先生。「これにはもとがかかる」と。毎日卯で磨いてある」と、まじめな顔で話しながら、つるりとなでられた当の西村さん。あの頃の日記でも出して見たら、もつともつと書きたくなるだ

ろう

十年近く、私は九州に帰っていない。神の憐みと、主に在る兄姉の愛に支えられて、北の果の炭坑町で牧師をさせていただいて、今五年半になる。函館には山崎兄御夫妻も居られる。何だかこうして書いていると、小倉に居るような錯覚に捉われる。斯る罪深き者の罪を赦し、用いて下さる神に感謝すると共に、いつも私如き者のために祈つて下さる小倉教会の旧知の皆様に、「有難うございます」と、申上げるのみである。

(日本ナザレン教団上芦別教会牧師)

### 植木基介

小倉教会は私にとって神学校を卒業して最初の赴任地であり、何かにつけて思い出深い教会です。赴任の前年、夏期伝道で二ヶ月近く奉仕をして教会の方々とは既に面識があつたのですが、いざ赴任となると、果して弱輩の私に

伝統ある小倉教会の牧師がつとまるだろうかと深い恐れと不安を感じずにおれませんでした。何しろ牧師が二十三才で、当時執事であった橋本、西村、佐々木、松尾、大和、山下六氏の平均年令が五十七才だったのですから、牧師以上に役員の方々の方がより戸惑つておられたのではないかと思います。何事も初めが大切であるといわれますが、確かに私にとって牧会生活の第一歩を小倉教会で過したことは恵まれたことでした。未熟な私にとって教会での各集会

や牧会の責任の他、国立病院、市立病院での病院伝道、苅田伝道更に幼稚園の責任は少なからず荷が重すぎたようになりますが、今振り返ってみると唯無我夢中でガムシャラにやつてきたような気がします。それだけに若気の至りからとんでもない失敗をしたりしましたが、そうした中で役員を始め会員が、どんなに祈りと熱心な協力で私を支えて下さったか分りません。キリストはこうして一人の牧師を育てて下さったのだと信じています。又、私事に亘りますが牧師館と一緒に住んでいた母と妹が受浸し、今日まで教会の交わりの中に導かれていることや、特に母が咽喉ガンの摘出手術をした時の教会の暖かい配慮は忘れることができません。あの頃堺町小学校に通っていた甥も尼ヶ崎で受浸しました。小倉時代のO-S教育が入信の基礎になつてゐると思います。そうしたことなどを考えてみると、小倉教会に対しても、むしろ私自身の方が得るところが大きかつたようになります。

六十五周年を迎えて、培ってきたこのよき伝統が愈々伸ばされるように祈つて止みません。それは単に伝統の殻に閉じ込もるということではありません。内的な聖靈の力が与えられて更に積極的な伝道が展開されるということでしよう。

これからも主の豊かな祝福の下に教会が愈々発展しますよう祈っています。

(西南女学院短大宗教主事)  
シオン山教会牧師

## 大和虎雄

初志を貫徹することが出来た。昭和五年一月五日上京専心

私が初めて小倉バプテスマ教会に来たのは大正十二年九月金森通倫氏の特別伝道会の時である。偶々私は眼に傷を受けて読書ができないでいた。その時講演会があるというので聴きに来た訳である。その話にみせられた。今まで知らなかつた人間の罪、天地を造り給うた神の存在、そしてその神が独り子を私共の救の為に十字架につけられたその愛の深さに心うたれた。バプテスマが何かも深く理解せぬままガムシャラに受浸した。全くお導きといふものは不思議である。教会で大伝道会があつていなかつたら私は教会には来なかつただろう。又大伝道会があつっていても私が眼を治療していなかつたら来なかつたかも判らない。實に神の御手は不思議と云うの外ない。

私は他家に奉公していた関係上教会の礼拝には出られなきことが多かつた。それでも私には聖書が人生の指針として与えられた。キリストの愛にはげまされて、その幾万分の一でも奉仕しようと隣人や教会の為にも僅かながら働いた。又時々問題が起つた時には片谷牧師に御相談して御指導を仰いだ。私は独学で高文の司法科試験を目指していたが中途で伝道に献身しようと考へたこともあつた。その時「先づ初恋を貫徹しなさい。それからでも遅くはない」と云つて下さつた。片谷先生は私をよく知つていて下さつたと思う。私は伝道者になれるような柄でなかつた。然しお蔭で

受験の準備をすることにした。片谷先生の御世話を駕籠町学舎に落着いた。閉ざされていた学舎を開いて貴い小倉教会員で一高在学中の松谷義範、それから小野敬晃、早稻田門野一郎、物理学校の河内謙、又野田募諸兄などで駕籠町学舎は小倉教会の延長の様な感じさえあつた。又学舎の生活中、私の寂しい貧しい生活に母の様に慰めと励ましを与えて下さつたのは小倉教会出身の本儀柳子姉であつた。昭和七年五月小倉に帰つてからずっと教会に通つて來た。微温的な私はそれ程熱中しなかつたが、回顧すると既に四十五年になる。教会の齢が六十五年、その三分の一を私は教会に連つて來た。その間戦争を経過したが、お蔭で大過なく五人の子女も順調に成長している。

私が二十才位の頃、片谷先生に感謝したら片谷先生から引照付新約聖書をいただいた。その扉に聖句を書いて下さいました「神の業はその遣はし給へる者を信する是なり」ヨハネ六の二九。その基督は聖書に約束されている「凡て祈り願うことはすでに得たりと信ぜよ、然らば得べし」マルコ一一の二四。

既に得たものと信ぜよと云われる。そして祈り続けると手に導かれつつ之からの人生の旅も続けたいと思つてゐる。

(現小倉教会執事)

## 佐々木 節 生

終戦の翌年昭和二十一年十一月に私達一家は疎開先の築上郡八屋より小倉に帰れる事が出来た。その当時大畠の橋本数太兄宅で集会をしている事を知られ、久々に同信の友と共に礼拝の出来る事を心から喜んで集会に出席した。シオン山教会の牧師菅野救爾先生が第一と第三の聖日午後二時よりこの集会のために御奉仕下さっていたのである。昭和二十年の第四次建物疎開のため小姓町にあった教会堂が取りこわされた時に、沢野牧師と橋本兄等の御努力で(会員の大部分は召集、微用、疎開等で不在)什器や器具を西南女学院や鍛冶町教会等に保管された時に、橋本兄宅に確保されたと言うピアノとオルガンがその集会場に据えられてであった。当時は求道者共に十数名だったが毎日旧会員や求道者が加わり日曜学校も始めるようになつた。

クリスマスには婦人会の方々が物資の乏しい時であったにもかわらず、各自物資持ち寄りで食事を作り家族的な交りの内に楽しい祝会をした。連盟を通してアメリカよりの贈物の衣料品や缶詰等の配給を婦人会の受持ちで数回した。昭和二十三年には現住会員も三十数名となり、三月より第二、四、五の聖日午後二時より鳥町の力丸良之助兄宅で礼拝がもたれるようになり、橋本兄宅と交互に行なわれる事になつた。バブテスマは西南学院の屋外水槽で菅野牧師によって授けられた。アメリカよりジュラルミン組立式会堂

が贈られる事になつたので愈々建設地を購入せなければならなくなり、役員は手分けして土地をさがし回った。市立病院裏、堺町小学校裏、富野入口の高台、古船場の三本松等が見つかった。菅野先生やターレー先生と共にこの候補地の実地調査を始めた。その結果、古船場(四二四坪余)を最適地として所有者と交渉し八月に話し合がつき、この土地を購入する事に決定した。此処は通称三本松と言つて最近転居して来た善行寺が北隣りにあり、南隣りは空地で二間道路をはさんで筋向いに稻荷神社があり、人家はない夜は人通りもなく狐の出でていたと言う淋しい所であった。そこにキリスト教の小倉バプテスト教会がお寺と神社との中に新入者として仲間入りをする事になつたのである。中村佐一牧師を招へいして愈々会堂を建設する事になつた。待望久しきかた小倉バプテスト教会の会堂もアメリカの同信の友による好意によつてジュラルミン組立式が建立された。同年十二月より聖日毎の朝礼拝が守られるようになつた。この当時のバブテスマは紫川の上流で行なわれた。現在の幼稚園舎がその会堂である。戦争によつて散らされていた信者や新しく加えられた信者等で毎日信者の数は増した。約三年にして植木基介牧師となり、北方にある小倉国立病院内に伝道所を開設し伝道を始められた。約五年にして金子純雄牧師となり、昭和三十三年に本会堂を建立し

(現小倉教会執事)

## 吉崎彦次郎

私の青年時代十八、九歳の頃です。昭和四、五年になりまますか、木材業に志して銀行員から実業界に入つた時の事であります。より立派な人間になろうと云ふ望みを以て精神修養に志したのです。

丁度、当時修養団体に「修養会」「希望社」と云ふ二団体がありまして、何れも頗る社会風潮に抗して眞の人格陶冶と、眞の新日本建設・世界平和を押し進めるべく真剣な修養団体組織を以て、住みよい国家社会改造に迄挺身したいと念願して、私は後藤静香の主幹する希望社に入団して「希望」と云ふ冊子を通して、毎週修養会を開いて互に心の練磨をしてまいりました。希望社の友は非常な勢を以て広まり、後藤静香は神の様に、まつり上げられ身も心も捧げる人が多くなったのです。此の世でもてはやされる者、必らずおとしいれられたとえの如く、たまたま本人が女関係から他の糾弾に会ひ、遂に希望社がガタガタと瓦解して終ひました。

彼を尊敬して居た私共にとって、此のみじめさは尙一層精神的打撃は大きかったのです。さりとて町の青い灯、赤い灯のカブエーに行つて、心をまきらすと云ふ事も出来ず心のより処を探し求めて居りました。教会の窓の下で、讃美歌の声を何度も聞いた事か知れません。然し思い切って教

会の扉を開いて入ると云ふ事も出来ませんでした。何だか袂門とか云ふ様に、何としても教会の門は入りにくいものです。

船場町の松岡材木店に居る時であります。裏に戸早孝太と云ふ小倉予備校の理事長をして居られる奥さんから、すすめられて小倉パブテスト教会に、出席させてもらいました。昼は材木をかついたり、配達したりの労働で、夕拝出席ですから身体のつかれが出るのか、教会堂に入つてからは、精神的にゆつたりとなつて、説教もいねむりしつつ聞いて居た事が度々でした。

当時の教会には、片谷牧師が居られて、執事は米谷、青木、柏原、大和さん等でした。教会に入ると、何時来ても一番後の席に米谷先生が頭を光らせながら、キチンと掛けて居られて、聖書と讃美歌を取つて私に渡し、席を案内していただきて着席させてもらつたのです。説教の文句は、何やら外人の名前が多くて意味も分りませんが只ふんいきが静かで居心地が好きでした。

信者と云ふ人は、何故もつとはがらかに大きな声で堂々と歌はないのだろうか、皆弱々しい様な感じがしました。でも、一番引きつけられたのは米谷先生です。当時、小倉商業の教師であり何時来ても几帳面に、然も表面づめたい様な感じがしますが、あれ丈熱心に奉仕してゐる湧き出づる力は、なにものがあるに違ひない、決して悪い人ではなさそうだ、まあ少しばらは判る様になる迄、来てみようと思

ふ事で出席して居りました。然し、矢張り月末月初めとかは、忙しくて一、二回でも欠席すると片谷牧師が、店まで出向いて来て色々動静を聞きに来る、態々私の様な者まで牧師が覚えて居て、訪ねて来られるので氣の毒やら有難いやらで出席せねば相済まぬと思ひ、又出席する。

その内、少しずつ判って来て、自分は決して法律を犯す様な悪い事はして居ないが矢張り神の前では罪人であると云ふ事が判って来たので、よしそれでは、神様から最も喜ばれるものになろうと思って、一生懸命に奉仕を思ひ立ったのです。

むつかしい理論や神学は、私にはわからんが、それは頭の良い方々が沢山居られるので他に譲り、自分は実業人であるし、教会の経済面に於て、多くを奉仕し、もつて伝道に、熱心な有能な人々が働きやすい様に援助し、間接的に御奉仕させて頂こうと決心したものです。

昭和十年、補助伝道者の住居を建ててあげたのもその一つ、東京では阿佐ヶ谷の希望（のぞみ）幼稚園の土地と建物を寄付しました。

中津教会では、会堂建築を遂に完成させ、其敷地内に借家を建てて差上げて居ります。此等は、皆私一人の力では決してありません。神様の豊かな御恩寵によるることは勿論であります。

神信仰は、ほんとに如何に上手な算盤でもはじく事の出

来ない無から有を生じる事です。私は經濟的方面に力を注いでまいりましたが、それにもまして人の心を救ふ事が、如何にむつかしいか、人生をまるつきり替えて終ふ事が出来るのが、キリストによる信仰です。私が、耶馬溪に於て製材業を営んで居りました時、昭和二十八年の大水害に会ひ、工場、倉庫一切流して終った事がありますが、決して悔む等の事は有りませんで、尚一層の元気を出して「よし！ より一層頑張ろう」と、神の御旨を求めて、神の愛を信じて、湧き出する力は神信仰なくしては、到底出来なかつたと振返つて見て、感謝して居ります。

クリスチヤンとしての商売人は、只、人の為神様の御旨に叶ふ様にと云ふ気持からする商行為が、回りまわつて自分で叶ふ様にと云ふ事をする事が最もかん要であります。自分がより多く儲けようとする商行為は、自分一人丈の力しか働かないが、人の為にする商行為は、それを受ける人々凡てがこちらの味方になつて沢山の人々から儲けさせてもらう事が出来るのです。

先程申上げました東京阿佐ヶ谷の家屋敷も、丁度私が戦地から復員して直ぐでしたが、生命が不思議に長らへて生きて帰つた事が不思議な程でしたので、最早なかつたもの

と思って、個人の所有物を捺印して渡して下さいました。世間からみれば、復員後は相場は戦前と大いに変り、資金はないし、此の家屋敷を相場で手放せば相当な代価で資金が出来るのに、教会に譲って了って一文なしから、又新らたに事業を始めたものです。良くこれを、家内が承知して私について来て呉れたものだと、ほんとに有難く思つて居ります。

此点からも矢張り結婚するなら同信の者が良いと思ひました。未信者でしたら、とてもこんな事は反対されて出来なかつたと思われます。

一文なしでも心の底では、大いなる神様への働きが出来居ると思へば、心の深みと申しますか、豊かさと云いますか、ほんとに大きな気持で事業に力が入ります。みえざる力が、何時も働いて益となつて居るのが感ぜしめられます。

斯の如く、はるかに過去を振返つて見て、信仰に入った為に、自分の人生観に大きな基盤と云ふか、如何なる事事が起きてもゆるぎなき神キリスト信仰の力が、働いて居る事をうれしく思ひます。大水害にあっても、此の不幸を幸にかえ現在では、あの大水害があつたおかげで現在の生活にかわる事が出来たと喜んで居ります。

凡てが、神信仰の賜物であります。三十五年に亘る私の歩みのねるさを深く思ひ起さして頂き、一層の精進と自己奮發、神の道伝道にひたすらましい進、神の喜び給う僕

となり得ますよう導き給はん事を、切に御祈りするものであります。(現小倉教会執事)

### 佐々木 益 男

私が小倉教会に正確に出席しはじめたのは昭和五年の秋からでした。そして七年に洗礼を受けて、その年の総会で執事に選ばれて、昭和十三年に東京にいくまで九年間、御世話をなりました。「その頃のこと」というのはこの九年間のことを使い出すまさに書こうということです。

ランカスター先生が宣教師として出席されていましたが、毎週日曜日の夕拝前の一時間バイブルクラスを指導されていました。多くの青年が、そのクラスに出て、引き続き夕拝に出席していました。

どういうわけか、その頃は多くの偉大な牧師やレンゲン伝導者の特徴が引きつづいてもたれていきました。今思ひ出しても、活気のあるされた教会だつたといえましょう。賀川先生、長谷川先生、本間俊平先生、新里貫一先生、升崎外彦先生等、忘れない信仰の先達が、つきつきと恵の体験を伝えて下さった。この先生達に会うだけで、心が燃やされる思いでした。

×  
×  
×

明專の学生や商業や工業の生徒が、早天祈とう会に、電車賃を献金するんだといって、かけ足で教会にやつて来る姿もたのもしく、大人をはげますこと屢々だつたようです。

夕拝の後、ことに冬の間には、ストーブをかこんで、立つたままだが、老人、青年、男、女、いろいろ信仰の疑問点を話していると、誰かが、自分の体験を話してくれる。それがまた、たまらなくうれしいことでした。祈とう会では、よく感話をつぎつぎにさせられたものでした。

青木さんがよく珍らしいものを持つて来て、皆にわけてくれたりして、信徒の交わりをしようなどと言われなつても、夕拝や祈とう会の後は、楽しい交わりが自然にかもし出されていました。

×  
×  
×  
×  
×  
×  
×

多分、賀川先生の提唱によつてできたものでしようが、消費組合があつて、便宜をはかつていました。その係は柏原さんだつたようく覚えていました。

幼稚園の小さな椅子に腰かけて、賀川先生の山上の垂訓と一緒に読んだり、片谷牧師がルツターの基督者の自由の講義をして下さつたりした。これは多分朝拝の済んだあとだつたと思う。それから、よく皆で、やはり、小さい椅子にかけて、食事をしたことを思い出します。

教会が独立して間もない頃に私は信徒として訓練され、ずつと独立教会のうちに育てられていたことをありがたいと思つています。そういうことが、その頃の教会に活氣を与えていたのかも知れないと思つています。

(西南女学院高校長 日本基督教団西萩教会執事)

### 六十粒の麦の種

青木 駿子

六十粒の麦の種を

また一粒また一粒

私たちの後輩が

つくりあげています

六十ー、六十二、六十三…………

一粒の麦の種が  
やつと六十粒になりました

長い長い六十年の歴史

短い短い六十年の歴史

迫害が

福音が

多くの手で

今、やつと六十になりました

あの宣教師の白髪が

あの少年少女達の叫びが

六十の歴史をつくつていつたのです

一年に一粒の麦

けして二粒はなりません

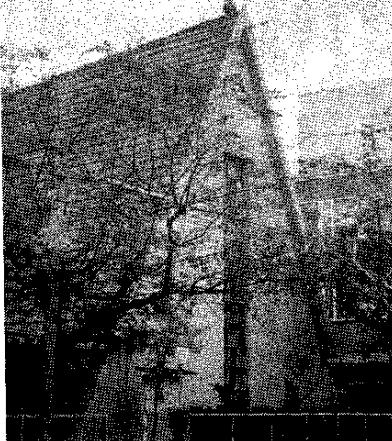
一枚一枚私たちの手が

つくりあげていくのです

神様はニコニコしていました



# 座談会 回顧と展望



ただきたいと思うのです。

**大和** 古い記録を見ても、みな若い人たちばかりですよ。ですからこれから金子先生をおしたてて、私たちもちろんついて行きますが、おしたてて行くのはやつぱり若い人たちだと思いますね。

**金子** しかし「老人は夢を見る」でありますからね。ひとつこんではいけませんよ。老人といつてはまだ失礼だけど。(笑い)

**大和** 六十年の教会の歴史の中で、私はそり、四十年に

なりますね。

**畠** 生きた歴史ですね。

**佐々木** 今のうちに記録を作つておいてもらわないとね。  
(笑い)

**大和** まず聖書を読みましょ。 (ヘブル人への手紙  
3・12 / 14 を朗読)

私が司会をすることになりますが、昔の会堂を知つておられるのは佐々木さんと私だけですね。小姓町の教会は地域社会にかなりの力をもつていました。このあたりも様子がずい分かわりましたね。古いことはともかく、これから希望について皆さんに語つてもらいたいものです。

**佐々木** これからは若い人たちが教会を担つていただかないとね。年寄りはどうも実行力に乏しいのです。その点、青年は精力的にやれるのだし、先頭に立つてい

**大和** とくに幻というのは私はなかつたですね。ただとらえられていただけですよ。

**金子** 個人の幻というより、当時の、ことに若い人たちが

教会に対してもういう期待をもつていたか、戦前の社会と今日ではかなり違うと思いますが、その中で教会

というものをどのように考えていたか……。

**大和**

私たちが信仰に入つた時代はですね。非常に信仰に燃えていた時代でした。キリスト教だけではありますんでしたね。若い人々はみな路傍伝道に出たものです。それから田町に其枝寮というのを造つて、そこに四人ぐらいおりましたが、その人たちも実によく伝道に出かけましたね。百万人運動ですか、金森先生、木村先生、本間先生と偉大な先覚者が多かつたですね。

ですから私自身はただとらえられて……。

**金子** そういう時代の大きな幻というものの中にひきこまれて、もやされたわけですね。

**大和** ですから、私は山室軍平先生などに手紙を書いたことがありますよ。

**畠** 大和先生たちの年代にすぐ続く年代層が教会にはおられませんね。ぼくはこれがちょっと不思議で……。

**金子** 大まかな言い方をすれば戦争による断層ですね。

**久保** (一同「戦争ね」とうなづく)

昭和十年頃から軍国主義一辺倒で、信仰ということはおきぎりにされましたね。私は昭和二年に海軍の学校に入りましたが、私のとなりペッドに信者が一人おりましたけれどね。その頃はほとんど福音を聞く機会

もなかつたですよ。

**大和** 大正の終り頃、小倉教会は集会が多かつたですね。

**金子** 記録を見て驚き、また感心したのですが、最初の神の國運動ですか、あの頃はすごいですね。一年間で教勢が倍になっていますよ。大正十一年の十二月末現在で会員数が三七名、そして一年間でですね、大正十一年度の教勢報告をみると受浸者が五六名、転入四、転出六で差引五四名の増で、七九名になっています。そして教会学校が四つありますね。

**大和** 教会学校はほうぼうでやりましたよ。

**畠** あ、教会から外にでてやつたのですね。

**金子** この頃の日曜学校は今のように全年令層のものでなく、いわゆる小学生ですが、在籍が二六〇名で出席生徒二〇三名、教師が二五名、教師の数は今とあまりかわりませんがね。

**久保** 小倉教会が生んだ教会はどういう教会がありますか。

**大和** 北方だけですね。

**佐々木** 小倉教会は移出教会ですよ。

**金子** 人的には生み出した教会ですね。

**佐々木** その時代にはたしかに若い人たちが皆献身的な気持をもつておつたと思います。

**大和** 大正十三年に今まで補助教会だったのが自給独立しもましたが、その時の若い人たちの決心は相当なもの

でしたよ、什一どころではない、それ以上さしがまし  
たね。

金子 大和先生は二回独立の決心に加わられたわけです  
ね、戦後、植木先生の時代にも。

大和 教会も波がありますね、異教社会で信仰生活を持  
続するむつかしさがあります。

上門 ぼくは教会が盛んだといふのは人數的なこともあります  
が、本当によろこびがあるかといふことが問題  
だと思いますね。そういう意味では今の教会に戒めや  
要求が多いのではないでしようか。

久保 教会に来ることが楽しみになるようにならないと  
いけませんね。

清水 しかし、たとえば茶道や連歌は中世の戦乱時代に  
安らぎを求める人たちによつて発展させられたもので  
すが、私たちのよろこびや楽しみがそれと同質のもの  
であつてはならないと思います。もつと外にむかつて  
働きかける力をほつきりたしかめたいのですし、その  
ためには教会訓練も少しはいやすなことがあつても必要  
だと思います。

大和 私たちが教われたのは、火のような救靈の熱意に  
よつたものですから、その恩恵に對してはむくいてい  
かなければならないと思います。

この座談会は昭和四十一年五月下旬、編集委員会の主  
催で開かれたものです。紙面の都合でせつかくの発言を  
ちぢめたり、割愛したことなどおわびをしなければなり  
ません。ことに後半は油がのり出して教会の現状の反省  
から伝道の本質論、方法論と賑やかな討論会の様相すら  
呈したのですが、またの機会に発表をゆずりたいと思  
います。ご了承下さい。  
(金子)



## 未来の小倉教会はかくありたい

吉崎泰博

六十年の歴史を歩んできた今日、私たちは教会の内外に、思わしくない事態を見る。社会は「金」をめぐつて騒々しく活動し、人はその中で自己を失いつつある。真理は人間の不完全な理性の中に閉じ込められ、近視眼的な実用追求のみが大手をふつてまかり通る。教会は力を失い、集会出席者は減少し、義務やつき合いで出席者が大きな顔をする。神学者の間でも、キリスト教の行き詰りが論じられ、焦躁は疑惑を生んでいる。私たちの周囲には、未来を楽観する資料はひとつもない。しかし、ここで私たちは、残された唯一の頼みの綱として、イエスのメッセージがあることに気付くのである。私たちは、キリストの愛のつながりを土台とし、その上にかたく立つて始めて、未来に希望をもつて臨むことができる。教会の未来が憂慮される今日こそ、その土台の上にしつかりと足をふまえ、大きなビジョンを持つて、未来にぶつかっていくことが切に要求されているのである。

では、私たちの教会の、未来におけるあるべき姿とは何だろうか。私なりの考えを述べてみたい。

先ず第一に、厳格なバプテスマを施す教会でありたい。神を信じているのか、信じていないのか、イエスが自分に對して、どういう関係にあるのか、また、自分は本当に信仰告白をするような人が主の名によつてバプテスマを受けてはいないだろうか。聖書もほとんど読んだことがなく、自己流の神観、宗教観をもつて、バプテスマを欲する人が、おそれ多くも神の前に、その欲を満してはいないだろうか。もしも、救いというものが、個々人の信仰の有無になんら関係なく、教会の授けるバプテスマのみによつて成就するのであれば、氣晴しの目的でも、自己満足の目的でも、つき合いの便宜上の目的であつても、バプテスマを志願する者には喜んでそれを授けるべきであろう。しかし、私たちの教会が、神さまから委託されているバプテスマの儀式はそんなに軽々しいものではないはずである。今後、少くとも私たちの教会では、バプテスマをもつと厳格に取り扱いたいものだ。

教会のバプテスマを厳格にするためには、先ず、教員である私たち自身の信仰を厳格に保たなければならぬ。過去において、あれほど宗派の相違に敏感であつたバプテスマ教会が、今日、他派の信徒を喜んで教員として認め

たりするところもあるのは、党派心をなくすという面では喜ぶべき現象であるが、そこに信仰のあらまじさという暗い影をも宿してはいなかろうか。

第一に、会員の生活指導に十分力をつくす教会でありた  
いと思う。現在、私たちが置かれている場は、ひじょうに  
特殊な場だと言える。中世までの宗教においては、日本で  
も、ヨーロッパでも、寺や教会で説かれる真理が、そのま  
ま、万人の認める真理であり、世間の人は皆それを疑わず  
その教えに耳を傾け、それを生活の中で実行していた。そ  
の時代においては、僧侶は、とりたてて信徒の生活指導を  
する必要がなかつたのである。しかし、今日ではどうであ  
ろうか。人々は自我に目覚め、科学は異常なまでに発達し  
ものごとを自分の理性の範囲内のみで理解しようとする風  
潮が起り、宗教は大衆酒場の片隅でさえ愚弄されていく。  
かつては、最も弱いものの支えであつた宗教が、今日では  
彼らによつて、足蹴にされているのである。そのような世  
間の風潮の中で、毎日を神のよき僕として生活することは  
づいぶん困難なことだ。その上、現在の日本においては、  
ほとんどの人がイエスの福音がどのようなものであるかを  
全然知らず、教会に来て始めてイエスにふれるのである。  
毎週欠かさずに来る模範的な求道者でさえも、一週間のう

宗教の砂漠の中で生活している。その求道者が、もしも、最近流行のハイカラさを求めて教会に出席しているとすれば、事は更に重大である。教会に出席しているといふことだけで、求道者を、又は信徒を、信仰者として信用してはならない。日曜日の朝だけではなく、一週間の生活の全部がキリストの愛の香りに包まれるようになるまでは、ひとりの入信者に対して、教会が責任をもつて指導しなければならないのである。「信仰の土着化」が叫ばれている今日、私たちの教会で、是非このことを成就したいものである。

第三に、「未来の私たちの教会は、「教会を生みだす教会」でありたい。家庭集会を上手に導いて、伝道所を作り、次から次に新しい集会を作り、教会を組織していくことを私たちの教会の主要な仕事をしたい。「私たちの教会の栄えること」と「を祈らず、「多くの教会の生れること」を祈りたい。そうすれば教会員数は増さないかも知れないが、会員の相互理解は深まり、牧師の指導はよくいきわたり、信徒は教会に対する責任をおのずから感じるようになり、信徒を望むとき、教会内に諸々の問題が生れ、それを解決する

という余分の任務が、教会に重くのしかかつてくる。歐米の教会とちがつて、私たちの教会では、前述のように、わざかにひとりの信者を育てるという事さえも、非常に困難な仕事なのだからである。

最後に、未来の小倉教会の建物についてのビジョンを語ろう。小倉教会は、次々に生み出していつた子教会の中央にあつて、それらの各教会の合同センターといつたようなものも備え、この地のキリスト教文化の中心でありたい。現在の敷地の三分の一は幼稚園の運動場として残し、残りの部分に鉄筋コンクリートの建物を建てる。巷にあふれて

いるような四角い、夢のない建物ではなく、芸術的に趣向をこらした、個性ある建物にすることは言うまでもない。

そのうちの一階には、牧師館と幼稚園を作り、二階には礼拝堂及び事務室などを作り、三階には教会学校の教室や、各種集会室を備え、四階に広い教会図書館をつくつて一般の人たちにも利用して貰い、五階には卓球などのちよつとしたスポーツの施設を備えた合宿を、十字架を掲げた尖塔の下などの場所に、祈禱室、納骨堂などを完備したい。

未来の小倉教会に対する私なりのビジョンを色々と述べきたが、ここに至つて、人々現実離れした感じがしないでもない。だが、私の感じるところでは、こういう理想か

ら私たちを引き離しているのは、単に、私たちの怠惰と、信仰上の不徹底と、おさなりな行為と、会員相互間の慣れ合いとであるにすぎない。六十年の歩みを終えた今、新しい教会形成を目指して、大きく成長したいものである。

(在京都・平安女学院短大講師)

## 青年会のことなど

山田雄次

小倉教会における思い出としては四年間のうちの前半にあたる青年会時代のそれが最も印象が深い。『行動』ということを信条としていた私は会長として、いろいろのプログラムを計画し、とにかく、忙しく実行していくことを思ひ出す。そして当時の私は忙しければ忙しいほど充実した感で満たされていた。しかし行為とか、行動といつても外見的なことがらに関心が止る時には本質的なものへの注意が欠ける。例にもれず、やがて私の行き方は行き詰り、青年会からの批判の矢面に立たされることになった。

『会長としての指導性なし』といつまことにショッキンな批判がそれであつた。『批判は易し』との内心の反感はあつたが、自分でも指導性の欠けは認めていたので批判を

受容し会長を辞した。

当時の青年会の問題（信仰的実態）はそのまま私自身の問題でもあり、責任のすべては私にあつた訳であるが、確かに、聖書の学び、信仰の交わり、更にはそこから生れる

信仰の訓練と伝道に奉仕といつた本質的な点において欠けるところが多かつた。

批判の根柢は充分であり、会長として深く責任を感じさせられたことである。

恥ずかしい思い出をえて引き出したのは他でもない。教会といふものは存在の本質において不斷に改革されいかなければならないということを痛感するからに他ならない。現代という巨大な時代からの問い合わせの中で非常な恐れとともに感する私達であるが、神の歴史を荷負うものたちとして、地道ではあっても真摯に課題と取り組み使命に応えなければなるまい。教会のあり方が本質においてそこから一歩でもはずれたら、無用の塵物となってしまうからである。

六十五年記念式典が、この時代における教会の新しい改革の始まりの外的なしるしとなることを願つて止まない。

（在福岡・城西バプテスト伝道所牧師）

## 教会について考へること

（壮年会） 畑 義彦

ジユラルミンの会堂のことはあまり知らない。新しい会堂が建つて始めてのバプテスマに十二人の中の一人として受浸した。十年の歳月は様々のことを私に教えた。星霜移り、人は去り、來たりして今日の自分をつくつた。十人の同胞は今は教会に居ない。どうでもよい使いようのない自分が残つた。牧師は私が当初、期待し想像していた程に有能でも行動的でもなかつた。口論したことなども今は懷しい想いがする。平凡なおとなしい牧師であつた。そんな牧師に見切りもつけず、十年を共に出来たのは、やはり人間的な魅力があり、尊敬すべき師であると思う。無能な口ばかりの信仰のうすい自分をともに角にも教会を忘れるとのないよう訪問してくださり導いて下さつた愛は大きい。私が一教会員の感受性の問題として、謙虚に反省すれば納得し、それで済むことであるかも知れないが敢えて十年間に得た小倉教会の体質的な問題を指摘し、今後の糧として、私的な意見を述べたい。  
① ライアン活動の重視——教会におけるスタッフ的な執事たちは信仰の先輩であり批判することになるが、やもすれば教会の生命たる具体的な働きが、老化し、意氣に感じて奉仕する一教会員にあまりにも荷が

かかりすぎ一致した動きが少なかつた。②閉鎖的であるといふこと——せすにおれない伝道——いうことも生活感がなく、内面的な与えてなおあまりある程の愛——いうものに貢献し、受動的な姿勢が常にあり、欲求不満をそれそれがぶつつけ合ひ解消、昇華すべき手段に欠乏していた。③システムに関すること——人を見てはならない——。確かにクリスチヤンであれば、目は常に神に向いていなければならぬ。しかし時として、反目や意見の対立があり、教会を離れた人々を忘れる出来ない。これは反省しなければならないことの一つだと思う。④歴史——いうこと——恐竜はその大きさの故に滅亡し、教会は歴史の永さ——いうことで停滞してはならない。六十五年の歴史にあぐらをかき、もつともな様な伝統を自慢し、拘束されているのではなくか。常に原点に立ちもどる努力を忘れてはならない。政府のやつている明治百年のお祭りであつてはならない。⑤忙しい——こと——今の時を競うことは尊いことだ。だがたとい聖日であつても特に集会とか会議の席に時間的なロスが多い。ロスの積み上げはなんにもならない。当時者と共に考えなければならぬのは決められた短い時間内に意識を全力投入する——技術的な点である。⑥エクレシヤとしての教会——教会は限られた個人の私有財産であつてはならない。地域に立脚した共有財産である。だから

常に再生する教会であるためにはもつと底辺の多くの兄弟に働きかけ伝道し、教いに導くための具体的な行動を考えるべきである。⑦各会と教会学校組織——オペレーションズ・リサーチ（O.R.）——いう方法が各企業でなされている。各会の活動の中にC.S.的な教育がなされないかと思う。中高生以下は学校的な組織的教育は肯定されても信仰は教育されることによつて生まれるのではなく、信じる心からである。心は十分な対話、人間的なつながり、温い交わりの生活の中から開かれるものだと思う。教会に二つの機構がある。それそれの目的と意義を持ち活動しているのは反面、ムダが多い。一本に統合すべきである。以上、卒直に批判する者として述べた。質か量か等まだ書きたいことはあるが、わがままな私見であることを認めて許して欲しい。そして信仰の薄いわからずやの頭を解析し、今何を成すべきかを教え導いて下さい。批判のことばの一つ一つに私の努力が主の恵みによつて強められ、解決されることを祈りたい。

## 力の限り十字架のために

(執事) 久保徳男

敗戦で日本全国の人が心のよどろきを失つた混乱の中

ルジヤの慰め的な罪滅ぼしの教会からは何も生まれない。

うな人生観ではお話にならないという事でした。めぐまれてイエス・キリストの信仰にみちびかれ、それまでは想像も出来なかつた魂の世界の眼を開かれた私はよろこびにふるえました。憎しみや戦争悪にみちたこの世の光は、イエスの十字架以外にはありません。あの戦争にも失われなかつた命のある限り十字架のために戦う人となりたいと決心しています。

六十余年の輝かしい歴史を有し、北九州宣教の中心にある小倉教会につらなることは誠に光榮であります。それと共に責務の重大を痛感いたします。

私共は活ける神イエス・キリストの上よりの御導きと、御恵みを確信し、それぞれの賜つた力に応じて十字架のために、イエスの示される御国の建設の為に働きましょう。

## 小倉人への第一の手紙

(執事) 松本 寛

寛

小倉教会もイエス・キリストのからだであるはずです。神にあえる唯一の場所であるはずです。でも今の私たちはどうなのでしょう。パウロにもう一度「小倉びとの第一の手紙」かなんか書いてもらわないといけないみたいです。教会員も執事も牧師も生れかわつて考えなおす、生きなおす必要がございませんでしょうか。牧師は教会員を育て、訓練しなければなりませんし、教会員は日曜午前中ク

リスチヤンをやめ、全てを牧師にまかせっぱなしにせず、小さな(大きなものが多い)たまのものでも土に埋めず、「私に出来るなら(神が味方なら出来ないはずはございません!)喜んで」と奉仕をし、執事も反省して牧師がその動きに専念出来るように配慮し、教会員のつまずきになる位ならいさぎよくその任を辞し、家族みんなであつまり、土地に根をおろした教会として、古船場の町の一つの光として神の愛と救と喜びを反映するものとなることは不可能なことでしようか。そこには神を主と仰ぐ神の家族だけが集り、或る学校の生徒さんが出席カードに印をもらうために参加するといつた悪もなくされ、幼稚園付属教会といふ思いちがいもなくなり、教会と共に生き、教会と共に喜び、教会と共に悲しむ一人一人の自由な自発的(そしてそりせずにはおれない)一致のみが存在するでしょう。本当にすればらしい教会ではございませんか。六十五才といえば人間では初老、しかし教会ではまだまだ初代的なものを持つているはずです。

壮年会 より  
青年会 より  
少年少女 より  
婦人会 より  
少年をふやせ!  
例会をもて!  
信仰を再確認せよ!  
ぼやぼやするな!

(関係あるものを線でつなげてください。一つ25点)

## 雑感

(執事) 清水文博

(青年会長) 木原照輝

## 私たちの責任

朝、目がさめるや否や早速テレビのスイッチを入れてニュースを聞く、家の中は、ほとんど一日中テレビが鳴つてゐる。番組の内容はほとんどナンセンスなものである。テレビが一家の精神生活の中心を占める家庭が非常に多い。まさに「億総白痴化」、「億総評論家」という言葉がぴたりである。このようなマスコミの影響が我々の教会の教勢の不振に少なからずあるのではないかと思う。テレビを見るごとに慣れた会衆は牧師の地味な説教を聞いたり、理解する努力をしようとはしない。教会だけの問題でなく人間の自己形成とか、内面的な問題に對しては実に無関心である。一つの問題を正視し執拗ようにこれを究めようとする承認的なエネルギーがもはや失われつつある。このような状態が我々の周囲にある現実である。この現実の中で伝道はどうな方法ですればよいのだろうか。現実のところ私は、なす術なく迷つてゐるのである。我々が從来教えられてきたよう教会的訓練を重視し、教会の中で眞の教会を形成し、純粹な福音の確立を志向することの外にもつと社会的な場面に出ていつていろいろなことをしなければならないという必要や衝動を感じるのである。

狂悪な事件が起つてゐます。それは決して社会の問題ではなく、何よりも家庭の乱れ、つまり「親子」の間柄が深く正しく考えられず、一人ひとりの果すべき役割が果されないことに原因があります。まことの愛によつて親と子が手をつないでいるかをもう一度たしかめなければなりません。救い主の導きに従う父・母・子供であることが必要です。

信者として私が教会のためにしなければならない仕事は多くあります。まだ知らない人びとに救い主を知らせ導く仕事はむつかしく大きいだけに勇気と希望にみちて胸がふくらみます。また明るい家庭を生み出すための指導と責任も信者である私たちの責任ではないでしょうか。救い主と

父母と子供と人びとの関係を聖書を通してはじめから学ぶ必要があります。聖書を学び、新しく造りかえられ、どの

ような問題にも対処できる愛と力を主からいただきたいと思ひます。

## 北方伝道所について

松 尾 孝 平



北方方面に対する伝道は戦前においても行われたことと思われるがはつきりした記録はないようである。

戦後ににおけるこの方面的伝道は大体二つの方面から進められた。その一つは小倉教会が再建されて間もなく中村佐一牧師が楠目さんのお宅に家庭集会を開かれて伝道を始められたことである。

今一つはシオン山教会が中心となつて国立病院の患者及び職員に対して進められた伝道であつた。この両面からの伝道の結果病院の職員の中にも会員となる者が増加し、内

部でも集会をもつよになつたので当時の小倉教会の植木牧師とシオン山教会の藤田牧師と協議の上、北方方面の伝道は小倉教会が担当することとなり、ここに北方伝道所の発足を見たのである。昭和二十八年三月一日のことである。爾来小倉教会から牧師を中心として会員による伝道が病院職員や地域の人々に対し、又患者に対しいろいろな方法で進められたのであるが、どうも病院中心になりがちで一般人によりつきにくいことが反省され病院の外に出ることとした。そのためには会堂が必要であるが急に実現もできないので地域の公会堂を借りたり、会員の私宅を利用するなど苦労を重ね、会堂の必要を痛切に感ずるに至つた。

たまたま国立病院の敷地一部開放の計画があつたので、バテスト連盟に申請して購入資金を仰ぎ、昭和三十四年に土地二八二坪九合が与えられるに至つた。これが現在の春ヶ丘の伝道所である。

同三十五年十月に至つてバラツク建ながら仮会堂十五坪五合の竣工を見、ようやく自分の会堂で礼拝を持つことができるようになつた。

三十七年三月には伝道所の専任として上門治牧師を迎えることができ、三十八年一月には十七・七五坪の牧師館も

でき上つて伝道の体制全く成るといふ形となつた。毎年春秋の特伝を開催して来たが三十八年四月には新生運動の一環としてアメリカの同信の友、フォード博士夫妻、ロイス医師夫妻を迎えて特別伝道を盛大に開くことができた。その後年々受浸者も増加し現在会員四十余名、聖日の礼拝も三十名を超える出席者を見るようになつた。

今後一層伝道に努め一日も早く独立の教会となり、これまで懇篤な指導をいたいた母教会はじめ連盟その他同信の方々の御厚志に酬いたいと念願している。そしてその実現の日も遠くないことを期している。

(北方伝道所代表執事)

開かれていく——という点では伝道所の進歩とか発展とかいうことをとりあげるなら、それはきわめて疑わしい気がしてきます。ただ教会となつて行こうとすること、そのことしか残らないように思います。

この頃、教会組織とすることが具体化してきましたが、自給することが教会となるということであれば、「二年目にすでに思い切つて自給にふみ切つたわけです。当時「谷底にけ落された獅子の子」なら良かつたのですが、学習塾を開くからといふことで自給したので何のことではない要領のよい豚児にすぎなかつたわけです。幸か不幸か塾はつぶれてしまひましたが、伝道所の方はそのまま自給を続けてゆくことになり現在に至つてゐるわけです。しかし危い繩わたりのようなもので、足もとを見ると何時ガラガラと崩れるかわからぬゝもろさを感じことがあります。

教会といつても結局それを構成するのは一人一人の会員であり、その信仰の有無によつて変つてくるのではないだろうか。その中で特に牧師の責任が大きいのではないだろうか。そうだとすれば、教会のもろさは、それを構成する一人一人の信徒のもろさではないだらうか。その点で教会、伝道所の進歩、発展ということは、信徒一人一人の信仰の深まりにつくるのではないかと思います。

けれども一面、教会の営みといふものは、他の人間的な営みと同様、進歩とか発展とかいつても、きわめて疑わしいものであることは、例えば戦争中の教会の姿をもち出します。いつの時代にも困難はあり、いつの時代にも道は

てきても判ると思います。現代の教会は——それがはなやかなものであれ、からうじて現状維持をするだけのものであれ、不吉な下降線をたどるものであれ——どこか何時か消えうせそなはかなさがつきまとつてゐるのではないかと思います。そしてこれは別の意味で教会が担つてゆかねばならない十字架では無いかと思います。

今日多く集つたと喜んでも明日はやはり元の少数者でしかない。胃の奥に痛みを感じるあの孤独感と焦燥の中で、結局栄光は私たちにではなく、神にあり、とこしえに残るものは神の言であつて、わたしたちの言葉やわざではなく、ましてや教会ではないということを知つてゆくのです。

「人はみな草のごとく、その榮華はみな草の花に似ている、草は枯れ、花は散る。しかし主の言葉はとこしえに残る」  
(Iペテロ一・二四。)

「しかし主の言葉はとこしえに残る」このことを知り、このことのために存在することを知つてゐる教会は、草のごとく枯れ、花のように散つてゆくことに満足するのではないかでしようか。もともと教会がこの主の言葉を忘れるときこそ、本当に不幸な、もともと消える他ない虚偽でありますが、この主の言葉に従うとき、そのもろさはかえつて、教会の強さといえるのではないかと思います。伝道所がこのような教会でありたいと願う次第です。

(北方伝道所牧師)

国立病院での集会  
(昭和三十四年頃)

青年会発足の頃  
(昭和三十九年頃)



## 湧金幼稚園の歩み

た。

湧金幼稚園は大正九年、小倉バプテスト教会附屬幼稚園として、市内小姓町に開設されました。最初の園長ミス・チャイルズは西南女学院創立者ロウ博士夫人となられた方です。当時市内には幼稚園の数も少なく、キリスト教保育を中心とした湧金幼稚園は、高く評価され、片谷先生ご夫妻のよいご指導のもとに少人数制の徹底した保育はよい成果をあげて参りました。

しかし歴史の波は、決しておだやかなはず、終戦直前、園舎は教会堂とともに疎開のためとりこわされ一時休園と

いう状態になりました。

戦後いち早く古船場町五丁目の現在地に、ジュラルミンの会堂が建設されると共に、幼稚園も再び、新たな歩みを始め、今日に至りました。公認私立湧金幼稚園となつたのは昭和二十七年三月であります。

戦後のベビーブームを迎えて、幼稚園は、まさに満員といつた状態が何年か続きました。会堂を平常は保育室として使い、毎土曜日には掃除と共にベンチを並べて聖日の準備をし、夕拝が終ると又ベンチをかえあげては積み重ねた日々が、かなりの間続きました。

昭和三十三年、新会堂建設があり、旧会堂がそつくり園舎として使用出来るようになります。しかしその頃旧会堂の老化激しく天井ははがれ、床板もあちこち不用心となつて、保育にあたつた先生方の苦労も又格別であります。昭和四十年九月、多くの方々のご支援により、新園舎の増改築がなされ、幼稚園らしい建物がととのつたのはたいへんうれしいことでした。

四十年より三年間園長の責任を担つて下さつた高橋さやか先生（現西南女学院短大教授）の御指導によつて毎月、園の保育内容や行事、その他子供の作品等をまとめて『あゆみ』を発行するようになり、ご父兄からも大変喜ばれております。

現在園児数は、年長組（光組）五十四名、年中組（星A・B）四十五名、年少組（すみれ組）八名 計百七名、四

クラスで教師は園長以下五名が従事しています。

園児の数は、ここ数年来少しづつ減少しつつあります。これは住宅地が德力、黒原等の市郊外に移り、又幼児数も一般的に減少しているため現状止むを得ません。しかし、たとえどのような時代が来ようとも失うことなく、高々と

キリストの光をかかげ進みたいと思ひます。時代は変り、教会付属園として湧金幼稚園のもつ独自性をこれから先、受けつかれて行くことを確信しています。

## 思い出にかえて

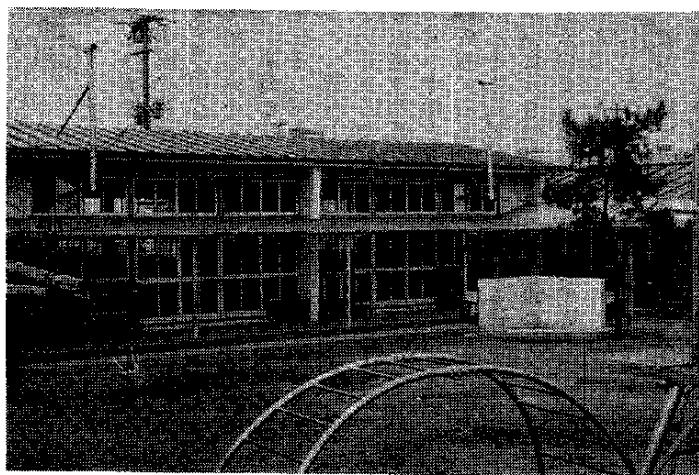
金子洋子

私がはじめて湧金幼稚園に勤めさせていただいたのはもう十五年も前のことになります。児童教育科を卒業したばかりでしたが、植木先生が園長をしておられ、主任は清田先生でした。植木（河村）桂子さんたちと「狭いながらも楽しい：」で会堂兼園舎の中をとびはねたり、うたつたりして一年間がまたたく間にすぎました。私は母教会の戸畠で幼稚園をはじめるために一年間でひかせていただくことになりましたが、再び湧金幼稚園でご用に当ることになるとは本当に思いもかけないことでした。牧師の妻として何かお手伝いをすることがあればそれはよろこんでさせていただくつもりでした。しかしこの間にかお手伝いではすまないようになり、教師、主任、園長と次第に重責を担わされるようになつてかれこれ十年になります。お世話になつた方、共に働いた先生がた、そして巣立つた子供たちのことかなつかしく思われます。幼稚園のために老いの身をかえりみないで面倒をみて下さった西村伝助先生なしには戦後の湧金幼稚園の復興はなかつたでしょう。園児が四・五十名の頃もありました。おなかがすいたといつては先生たちとあみだくじをひきあつたりしたものでした。魔物利用でお互いの腕をきそいあつたことも、ねずみ退治にほうきをふりかざしてあられもない姿をさらしたこともなつかしい思い出です。その頃から考えると内外ともに本当

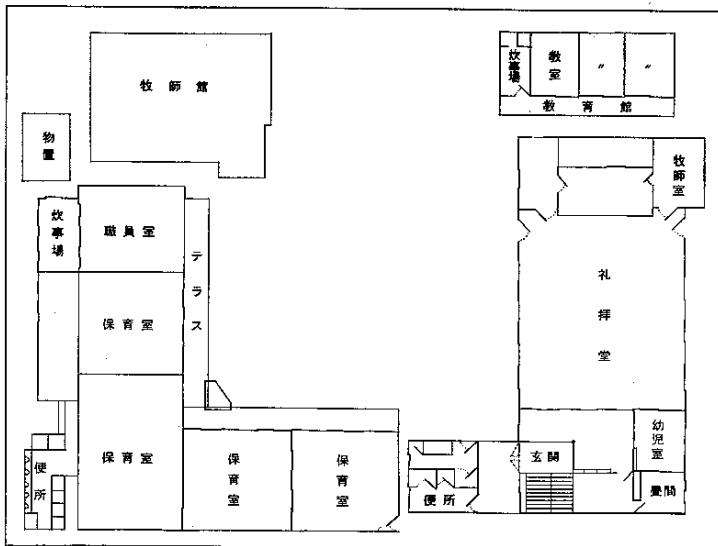
に立派になりました。教師の献身的な働きはもちろんですが、園長として指導して下さつた力丸夫人や高橋さやか先生をはじめ教員の、ことに理事の諸先生また母の会の皆さんとの支えと協力なしにはできないことでした。それにもまして、神様の恵みをしみじみと感じます。かつて私が受持つた子供ももう大学生になります。小学校を訪ねても、私よりも背の高い子が「先生」と手をふって近付いてくれるとき、はぐくみのわざにあたらせていただくもののさいわいを思います。幸福な結婚生活に入られた先生がたもあります。きっと園での思い出を家庭の中でも生かして下さっていることでしょう。巣立つて行つた子供たちの心に、またそこで共に働いたものの胸に、いつまでも湧金がとうより湧金幼稚園で学んだ主イエスさまのおことばの一つ一つが——それこそわきあがよう——生き続けてほしいと心から願わずにはおれません。

## 湧金幼稚園 職員名簿

園長	金子洋子	(すみれ組——年少組担当)
主任	青木佳代子	(光組——年長組担当)
	大江雅子	(星組A——年中組担当)
	中島慶子	(星組B——年中組担当)
月守京子		(光組担当)
庶務会計	千綾恵美子	
顧問	高橋さやか	



小倉バプテスト教会（小倉区古船場5丁目）及び漢金幼稚園平面図





## イエスを仰ぎ見つ

金子純雄

「歴史の重み」ということを感じことがあります。

十一年前、神学生として夏期奉仕から引続いて聖日のご用にたずさわらせていただいていた私が、小倉教会から牧師として招かれたとき、友人は「苦労するぞ」と言いました。しかし、恩師の三善先生がその昔、八幡教会に口ひげをはやして赴任したといふ話を思い浮べながら、いささか肩をいからせて就任した私にとつて、小倉教会はきわめて居心地のよいところでした。壯年や婦人の人びとは、親子ほども年令の違う牧師に対し、礼を失うことなく、しかもあふれるような愛と善意を表わして下さいました。牧師の若さ故の失態に対して、もつときびしくあつてもよいのではなくいかと時にとまどいすら感じることもありました。青年や少年少女たちは私にとつて肉親の弟妹のように思えました。友人のことばは、ですから何かやつかみ半分としか思えませんでした。

しかし、きびしい言い方かも知れませんが、そのように感じ、受けとめてきた背後には歴史ある教会として当然担うべき責務を真剣にたずねることなく、その重さをどこか回避して、閉鎖的な交わりの中に自己のよろこびや平安を見出そうとする気持あるいは願いがひそんではいなかつた

でしようか。

記念誌にふさわしくないことばかも知れませんが、小倉教会の半世紀をこえる歩みは、一面において人間の失敗と挫折にみちた記録であるということを卒直に認めなければなりません。先人のすぐれた足跡にもかかわらず教会は時の流れに抗し得ないではないかというようを疑惑がふと頭をかすめます。戦争の激化は教会を疲弊させ、戦後のキリスト教ブームで仮会堂にあふれる人を集めた教会は、昭和元禄といわれる今日、笛吹けど踊らずという状態に頭をかかえています。社会の動きにまるでほんろうされているような教会の無力に対する反省がどれだけなされているでしょうか。多くの人が教会を訪れ、信仰をいいあらわし、そして多くの人が去つて行きました。私の在任中だけでもどれだけの数になるでしょうか。深い悲しみを覚えます。探ししかたが足りないからだと自分にいいきかせながらも、むなしくこだまするような呼び声に、教会とは、信仰とはいつたい何かとあらためて問わざにはおれない夜をどれだけすごしたことでしょうか。私にとつて、教会設立六十五周年を迎えるということは、そのようなことに対する痛みと反省なしにはできないことです。歳月の長さは、それだけ痛みを増すことになります。それだけ自分の無力と不信を思いしらされることになります。

しかし、教会の歴史は究極的には勝利の主の恵みと力をあかしするものです。人間の数多くのあやまちにもかかわらず、主がその血の代償をもつてあがなわれた教会は、い

かなる力によつてもそこなわれることはあります。会堂をこわされ、動員や疎開で会員が離散したときも教会は決して失われたではありませんでした。今日、世俗主義の嵐はかつてない力をもつて教会をおびやかしてしまいます。教会はこれからもさらに大きな試練に立たされるでしょう。しかし、それとて教会のうちに流れる生命そのものを否定し、抹殺することは決してできません。

教会は主のものであるといふことに本当に気付くとき、主の勝利の行進に連ならせていたいいる光榮と責任の重みがひしひしと感じられます。小倉教会は主のものとして主とともに歩み続けてきました。多くの先輩たちが証人としてむらがる中を走りぬこうとするとき、緊張と胸の高鳴りを禁じることができません。

六十五周年を記念することは、決して「過去の栄光」をたたえることではないと思います。また失敗をあげつらうこともあります。教会をご自分のものとして守り支え、導いて下さった主の恵みを思い起して感謝をさげるときであり、この「主の教会」にひとしく召されている事実を確認し、生ける主の前に信頼と服従のまことをあらためて告白すべき時だと思います。

最初にも述べましたように、神学校を出たばかりの私にとって小倉教会は、まさにここちのよい揺らんともいえき所でした。母教会に対するような感情を私は押さえていません。しかし、教会は私たちがそこで生れあるいは育つたというだけではない召命の場で

あると信じます。私たちはそのおごそかさに気付かねばなりません。小倉教会は私のために握手式を開き、また牧会研修のために二ヶ月近くも不自由をしのんで私を米国に送つて下さいました。教会員の皆さまのあたたかい配慮と祈りを私はいつも感じてうれしく思っていますが、それとともに、牧師の握手礼ということが教会員ひとりひとりにとつても召命のおごそかさと神の恵みに対する責任を一層明らかにする時であつたこと、また牧師と共に学び成長しようとの願いが私を米国にまで送り出して下さつたに違ひないということをえて申し上げたいと思います。私たち共に「主の教会」に召し出され、主のみわざにあづかるものとされているのです。召命の事実がたしかめられて行くとき、小倉教会が背負つている「歴史の重み」をひしと感じないわけには行かないでしょう。それは苦惱を負うことであり、同時に主の絶大な力にあずかることなのです。このことを欠くなれば教会はもはや名ばかりの、無力な人間の一つの集団でしかありません。しかし教会の主であるイエス・キリストが仰がれ、信仰においてしつかりと彼に結びつくとき、人びとを本当に生かし、社会を動かし、あらゆる敵を粉々にする力は私たちのものです。

それ故に、教会設立六十五周年の記念にさいして、私は自分自身にかたく言い聞かせながら兄弟姉妹たちに訴えた

「信仰の導き手、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ走ろうではないか」

(ヘブル十二・二)

## 教会略史



明治二十四年二月 小倉講義所開設、これより一年早く、若松に九州最初のバプテスト講義所が開設されたが、同講義所の後藤六雄氏の手でその翌年、小倉に講義所が設けられることになり、毎週木曜日に同氏による出張伝道が行なわれた。場所は室町五三番地で現在の記念病院の裏あたりになる。

明治二十四年一〇月 南部バプテストの伝道区域に移されることになり（それまでは北部バプテスト）芦屋、門司に講義所が設けられ、門司には小倉から来住甲子太郎氏が週一回出張伝道をした。

明治二十五年一月 ブランソン宣教師が、次いで三月マコーラム宣教師が来倉、京町一丁目に居を構えた。当時、小倉は人口一万五千位の町で二十四年二月に九州鉄道株式会社小倉工場が金田に設立され、同年四月には門司—黒崎間の鉄道が開通している。小倉駅は室町につくられ、教会のあたりも人通りで賑つた。

講義所には当時、伝道者として前記の後藤六雄、来住甲子太郎の両氏の外、北島亀次氏及び婦人伝道者守屋エイ、徳富ノブ姉らがあり、既に一六人の受浸者と二五人の会員及び二〇人の求道者があつたと報告されている。南部バプテストが生んだ最初の伝道者菅野半次牧師はこの頃受浸した。

明治二十五年九月 ブランソン氏帰米、かわつて同年一〇月、ウワーン博士夫妻来倉。

明治二十六年一〇月四日 門司バプテスト教会が九州最初のバプテスト教会として設立。小倉講義所は若松、福岡などと

ともに門司教会に包括されていたようである。

明治二七年一月 川勝鉄彌牧師、横浜より来倉、三ヶ月間小倉伝道に従事したのち福岡に転居。

明治二七年四月 マコーラム氏、門司に転居、同年秋、健康を害して一時帰米。ウワーン博士、福岡に転出。

明治二八年秋 メイナルド宣教師、福岡より来倉。三三年に宣教師館が建てられるまで土造の民家で不自由な生活を送り、そのため健康を害したりしながらも、その後四年間に日本を去るまで一六年間、小倉伝道に終始したメイナルド氏のことは銘記されるべきである。同氏を助けた伝道者として野崎喜三郎氏の名があげられる。当時、礼拝出席者一二七二〇名、日曜学校は五〇名程度であり、家庭集会や兵営、病院等に対する聖書や小冊子の分配、訪問伝道がさかんに行なわれた。

明治三六年一一月三日 教会組織。小倉浸礼教会と称す。初代牧師、川勝鉄彌氏。この四月、南部バブテストによる九州伝道十周年にあたり、第一回の西南部会が福岡で開かれた。伝道十年で七教会三講義所、会員百余名を数えるに至つている。

明治三八年三月 八幡に伝道を開始、川勝、メイナルド両師がその開拓にあたつた。

明治四一年二月 メドリング宣教師、来倉。同年六月以降、鹿児島伝道に従事。

明治四一年 川勝牧師、山口県の伝道のために下関に就任。かわつて下関より池田清造牧師が着任、同氏は四四年三月、小倉を辞して大牟田の開拓伝道に当つたが同年七月に永眠された。

明治四二年一月三〇日 八幡浸礼教会設立。

明治四四年四月 藤沼了頭牧師、福岡より着任。

明治四四年一月 ウイリングハム宣教師が小倉に定住、その後七年間北九州一円の宣教に尽し、大正七年帰米後三ヶ月流感にかかり日本人の友の名を呼びながら召された。大正八年にはメドリング師もまた流感のために鹿児島で召されている。

大正二年五月 藤沼牧師、飯塚へ転任、小野兵衛牧師が札幌より着任。

大正七年 小野牧師、久留米へ転出。五月中青柳茂牧師着任。ホールデン宣教師は九月に来倉。

大正八年一月 青柳茂牧師、熊本へ転任。

大正九年二月 仙台より片谷武雄牧師着任。

大正九年三月二八日 教会堂獻堂式。小姓町四丁目で現在は一部が料亭「吳羽」、一部は小文字通りの道路となつてゐる。幼稚園の教室と礼拝室が戸で仕切られステージが角にあつて、戸をひらくと部屋は倍の広さとなり、ステージは扇型となつた。ミス・チャイルス(ローワ夫人)が最初の園長に就任。

大正一一年一〇月 片谷牧師の握手礼式開催。

大正一三年一〇月 教会の自給独立を断行。大正六年、小倉教会で開かれた年会で五年運動が決議されたが、その一つとして大正一二年一〇月に行なわれた金森伝道では三日間の出席者八七五名、決心者二五〇名、バプテスマ志願者四八名に及び、教勢は倍以上に伸びた。翌年行なわれた自給独立はバプテストに於ける最初の快挙であつた。

大正一四年一月 自給独立宣言。

大正一四年二月 ミス・ランカスターによるバイブルクラスが開始される。

大正の末から昭和一〇年頃までの記録によれば毎日、實に多くの特別講師による集会が開催されている。ことに昭和四年は協同伝道、神の国運動が提唱され、展開された年であり、時代の暗雲を何とかして吹きはらおうとする教会の祈りと歎が感じられる。小倉教会がこの約一〇年間に招いた講師はおもな人だけでも、木村清松、本間俊平、野辺地天馬、田村直臣、長尾半平、小原国芳、平岩宣保、青木澄十郎、長谷川敏、沢村重雄、佐藤繁彦、田崎健作、杉山元治郎、賀川豊彦、荒川又六、斎藤惣一、升崎外彥、龜谷凌雲、海老名彈正、日野原善輔、千葉勇五郎、森永太一郎、岩橋武夫と、その頃の日本のキリスト教各派各界の有力な指導者たちをほとんど網羅している。

昭和八年四月 片谷牧師、湧金幼稚園長となりミッショングから独立する。

昭一五年一月 教会名を小倉バプテスト教会から小倉基督教会に変更。

昭一六年五月 ランカスター師、帰米。

昭一七年三月 片谷武雄牧師、小倉教会を辞任。教会は名誉牧師に推举の決議を行なう。

昭和一七年四月 沢野正幸牧師、就任。

戦局は次第にはげしくなり、教会員は動員或いは疎開でほとんど離散し、牧師もまた徵用に出され、昭和二〇年終戦を前に強制疎開で会堂はこわされた。

戦後いち早く、小倉に集つた教会員はシオン山教会牧師菅野救爾氏の助力のもとに橋本数太、力丸良之助両氏宅で礼拝を守つた。ミス・ターレーも小倉の集会を応援した。その後、ミス・パロー、ミス・ミラー等の宣教師によつて引き続いてバイブルクラスがひらかれるようになつた。

昭和二三年八月 古船場五丁目の現在地を購入。

昭和二三年一二月 中村佐一牧師 就任。

昭和二四年三月 ジュラルミンの組立式会堂及び牧師館建設。

昭和二四年一一月 中村牧師握手式開催。

昭和二五年四月 幼稚園を「めぐみ幼稚園」として再開。

昭和二六年七月 中村牧師 辞任。

昭和二七年三月二十五日 めぐみ幼稚園を従前の「湧金幼稚園」と名称変更、福岡県知事の正式の認可を受ける。設置

代表者、西村伝助氏。

昭和二七年四月 植木基介牧師 就任。

昭和二八年一月 自給独立教会となる。

昭和二八年三月一日 国立病院の職員を中心に北方伝道所発足。

昭和二八年五月二九日 宗教法人日本バプテスト小倉基督教會規則の認証を受ける。

昭和二八年一一月八日 教会五十周年記念会。

昭和二九年三月三一日 植木基介牧師、小倉教会を辞任し、関西学院大学院に学ぶとともに尼崎の開拓伝道に従事。

昭和二九年三月一六日 金子牧師 就任。

昭和二九年一一月 本会堂献堂式。

昭和三四年八月 北方伝道所土地を現在地（国立病院跡）に購入。

昭和三五年三月 西村伝助氏の死去により湧金幼稚園の設置者名儀を宗教法人日本バプテスト小倉基督教會代表役員  
金子純雄に変更登記。

昭和三五年一〇月 カルコート師の配慮で芦屋基地の古材により北方伝道所の仮会堂を建設。

昭和三六年一月 伝道所の諸集会を教会から独立して行なうようになる。

昭和三七年四月 北方伝道所上門治牧師就任。

昭和三八年一月 伝道所牧師館完成。

昭和三八年三月 金子牧師接手式開催。

昭和三八年四月 パプテスト新生運動チーム集会で米国テキサス州ロングビューよりフォード博士夫妻、シャトルヨリロイス博士夫妻を迎える。

昭和三八年一一月三日 教会設立六〇年記念礼拝を片谷武雄牧師夫妻を迎えて行なう。

昭和三九年一一月 金子牧師 牧会研修のために米国テキサス州へ一ヶ月半の間旅行。

昭和四〇年四月 山田雄次、内村茂両兄を西南学院大学神学部に推薦。

昭和四〇年一〇月 洪金幼稚園々舎一部増改築。

昭和四三年一一月三日 ミス・ウォルターズ 宣教師として就任。

昭和四三年一二月一日 教会設立六五周年。献堂一〇周年記念礼拝、講師 植木基介師。

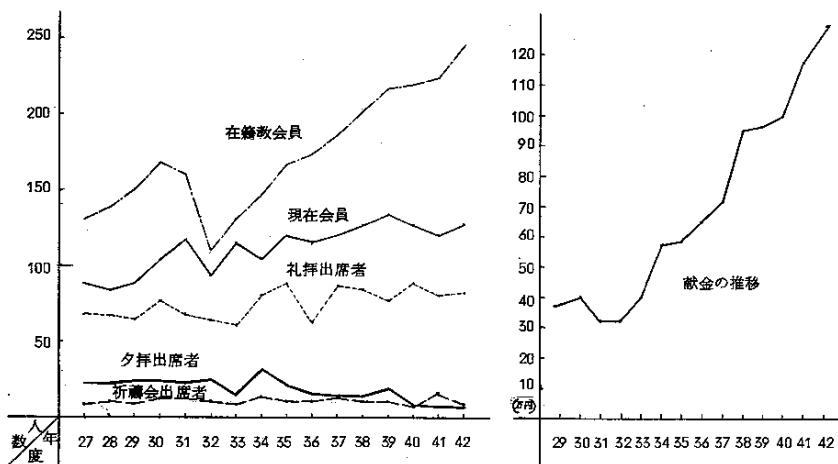
昭和四三年末をもつて金子牧師は小倉教会を辞任して平尾パプテスト教会に転任することになり、後任に光来出政

治牧師が決定。(四四年一月一二日就任式の予定)

## 教勢の推移

年 度	在籍教員数			現在会員数			集会平均出席者数				受浸者数	献金総額	
	男	女	計	男	女	計	礼拝	夕拝	祈禱会	C.S.			
明治 36 年							34	20	25	19	80	9	
" 45 "			53				13	13	10	6	80	3	
大正 12 年	102	65	167	46	33	79	48	25	20	203	56	1,514.09	
昭和 5 "			280				74	28	33	14		20	1,908.99
" 10 "			207				62	34	20	10		2	1,429.79
" 13 "			168				42	31	24	10		10	1,440.08
昭和 27 年	51	80	131	30	57	87	68	21	9	52	7	219,100.00	
" 28 "	54	84	138	28	55	85	66	21	11	181			
" 29 "	59	92	151	29	59	88	64	22	9	193	12	364,912.00	
" 30 "	67	101	168	38	64	102	75	22	12	184	12	398,113.00	
" 31 "	58	101	159	41	74	115	67	21	12	145	8	311,491.00	
" 32 "	39	71	110	32	60	92	63	22	10	134	3	314,420.00	
昭和 33 年	41	88	129	35	77	112	60	14	9	99	18	407,542.00	
" 34 "	44	100	144	37	68	105	80	29	14	135	9	579,857.00	
" 35 "	55	111	166	43	76	119	87	21	10	213	21	590,394.00	
" 36 "	58	115	173	41	74	115	62	15	10	192	8	648,121.00	
" 37 "	64	123	187	45	77	120	87	13	11	170	7	712,338.00	
" 38 "	71	131	202	44	82	126	83	13	10	134	14	948,496.00	
" 39 "	79	138	217	47	85	132	76	19	10	205	10	957,001.00	
" 40 "	80	139	219	46	82	128	88	8	7	192	10	992,759.00	
" 41 "	85	142	225	45	75	120	80	7	15	162	6	1,175,078.00	
" 42 "	87	157	244	42	85	127	81	6	9	177	14	1,295,731.00	

(昭和27年～42年) 16年間の教勢推移グラフ



## 教 会 役 員 名 簿

昭和43年12月1日現在

牧 師 金子純雄

宣教師 D・ウォルターズ

執事 大和虎雄(代表執事・会計) 吉崎彥次郎(伝道)  
佐々木節生(CS校長・伝道) 松本 寛(奉仕)  
久保徳男(伝道) 清水文博(奉仕・書記)

### 各会役員

	壯年会	婦人会	青年会	少年少女会
会長	大和虎雄	大和キヌエ	木原照輝	宮原泰子
副会長	松本 寛	玉谷 艶美	斎藤あつ子	宮崎保子
書記		金子 洋子	月守京子	久留島寛子
会計	久保徳男	辛島信子	清水文博	田中郁子
伝道委員	河野重良	竹尾幸子	山賀悦子	辛島修二
奉仕委員	畠 義彦	村田寿美子		辛島千恵子

### 教会学校運営委員

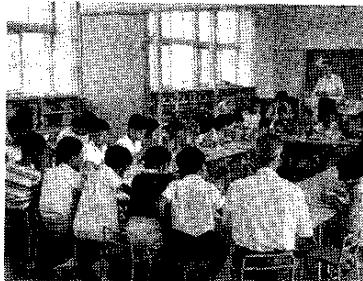
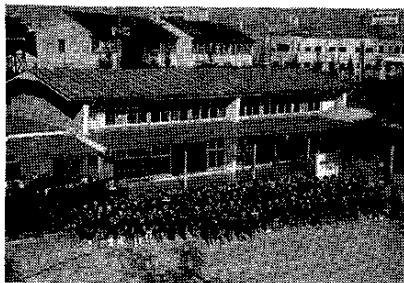
佐々木節生(校長)	松本 寛(主事)	金子 洋子(小学校長) <small>書記</small>
千綾恵美子(会計)	大和公子(中・高科長)	青木佳代子(幼稚科長)

### 湧金幼稚園理事(○印 常任理事)

○金子純雄(理事長)	○大和虎雄	○佐々木節生
久保徳男	○吉崎彥次郎	松本 寛
○清水文博	力丸良之助	竹尾幸子
高橋さやか(顧問)		

# 明日に向つて

一  
ト



## 編集後記

本誌を発行するに当たり先づお詫びを申し上げねばなりません。それは六十周年記念として発行すべく原稿を頂戴しておりましたが委員である私共の非力と種々の事情で延び延びとなり遂にその機を失しましたことです。

今回献堂十周年、創立六十五年の記念礼拝と愛さん会を開くことになりましたので是非ともこの際記念誌を完成したいと願つた次第です。特に十一年間小倉教会の牧会に当つて下さつた金子純雄牧師が召命を受け本年末を以て福岡市平尾教会へ転出されることになりましたので一層その願を強くしました。

本誌は誠にささやかなものではありますが、先輩諸兄姉並びに教員の熱き祈と奉仕の賜であります。又編集については金子牧師の御指導と清水文博兄、畠義彦兄等の御奉仕の結果であります。なお、原稿は大部分が五年前のものであります。が今回新に数氏のものも頂きました。私共は絶えず過去の恵みを感謝すると共に将来に向つて更に前進しなければなりません。この小誌がその前進の拠点ともなり足場ともなれば誠に幸です。

大和虎雄



昭和43年12月1日

小倉バプテスト教会

北九州市小倉区古船場5丁目  
Tel 52-2862

記念誌編集委員会

委員長	大	和	虎	雄
委員員	金	子	純	博
"	清	水	文	彦
"	畠	義		